J2.99:10

10 of 20

Nov. 1944
Vol. 2, no. 9

67/14
C

ポスト文

九州

十一月號

ポストン文藝

十一月讀物特輯號

目次

表紙繪　野田夏泉画
文藝協會同人(寫眞)　パウエル博士撮影
スケッチ(繪)　重富初枝画
カット　進藤舟水画
巻頭言　編輯同人
勤勉を訪ねて……　青木伸 2
靜寂なる睦しさ(詩)　外川明 3
美しい心　野田夏泉 8
圍碁　翠川敏 11
三人の白拍子　曾我部了勝 17
時代に浮び上る者　谷川江浦草 19
刀の話　岡本稔 25
雜斷片想　矢形溪山 27
行程世分　中村正敏 30
沙漠夜話　N・M 43
ポストン風景　大岡周洋 38
詩吟の話　松原信雄 41
ユートピア　重富初枝画
スケッチ(繪)　瀧井生筆
原板

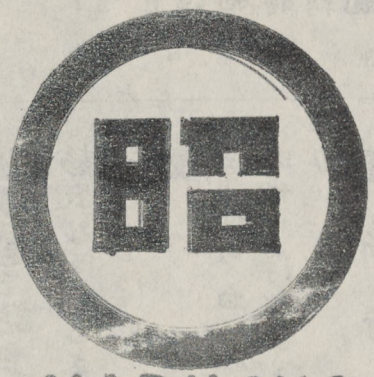
詩と俳句
生活斷章　外川明選
朝のひと時　片井溪巖子 45
古日記　有田百 46
淋しき秋　土田箕人 47
旅の歌　蒼逸 47
流れ星　阿世賀紫海 48
俳句・情歌・民謡　木内春波 49

短歌
長月歌會詠草集　永瀬勇選 50
選後隨録　永瀬勇 56

川柳
川柳句會集　島原潮風選 36
句會並添削　島原潮風選 56

創作欄
一環　久留島扶紗子 65
白衣の天使　鈴木政一 72
開く白蓮　長藤行精 76
二世の悲戀　苫川積三 79
編輯後記

忘れぬ其風味
愛用の節は
マル昭を



MARUSHO

アリゾナ州グレンデール市
昭和醤油醸造合社

SHOWA SHOYU BREWING CO.
Rt 2, BOX 51, GLENDALE, ARIZ.

COMPLIMENTS
of

NATIONAL GROCERY CO.

MESA, ARIZ.

WHOLESALERS - QUALITY GROCERS

矢形前主幹送別記念撮影

昭和十九年六月二十七日
於第十九部落パウエル博士撮影

（向テ右ヨリ）

後列
田中松香
鈴木胡仙
和氣湖月
竹田雀村
島原潮風
長谷川蒼逸
山根貞吉
池田愛子
鈴木緑松
佐野緑葉
永瀬勇
永瀬曉鐘

中列
清時文子
安本時子
柳本錦子
貴家志ま子
猿渡則子
川口静洋
片山幽香
柴田よし
兒玉なを

前列
菅野大海
櫛田九平
松原信雄
稲垣牧東
矢形溪山
松岡青山
谷本晩香
山西里江

巻頭言

先日、水をジャー〳〵出して庭を海にして遊んで居た小供に、叱言を云つたところ『ママ・ボース?、ガバメントがミー達のボースぢやないの、』是が四つになつたばかりの子供の言葉である。どうせ大きな子から聞いて來たのであらう。

何時かも街燈に石を投げてゐたボーイスに注意をしたら『ガバメントんだものオーライよ』つて言つて居た。彼は其の後姿に太々しいものを見出して淋しい憎悪を感じた。十四五前後の女の子達がよく大人を批評し悪口するのにも吃驚りする。併し此歪みくねつたモスキドツリーのやうな、不健康な子供の思想も、大人の社會の鏡ではあるまいか。讒謗、批評、それから不用意に吐かれる詞、それがどんなに人々を哀しい現實の中に追込んでゆきつゝあることか。

秋くる朝の、さわやかなしじまに立つて、今日も一日、人の誹謗に傷つけられず、毒ある詞を舌にも棄せず、文學の中から、美しい情操と、眞理をくみ取つてゆきたいと希ふ。(F・K)

詩

靜寂なる睦しさ

―レコードの夕の或老夫婦素描―

青木伸

うん、よく聽えるよ
何回聽いても虎造の　森の石松　はいいなあ
いいや、餘り暑くはないよ
いい風が吹いて来る、青葉の匂ひもする
星は輝いてゐるだらう。天の河も流れてゐるだらう。
それはさうと、お前は立ってゐるのかい
えらいだらうから腰を掛けるがいい
そしてゆっくり聽かうぢやないか
去年は俺の眼もよく見えたのだがなあ
今年は・眼も見えず・脚も動かず
ポストンのいざり勝五郎か　あはは……
笑聲の蔭を掠める。在米五十餘年の記憶のフイルム
然し、滿足し切ってゐる老夫婦の手と手は
ボギー車の手摺に仲よく重なり合ってゐた。

一九四四――八月

藤間勘須磨を訪ねて

朗和より來訪中の藤間勘須磨に就いて「何か書いて呉れ」と「ポストン文藝」の松原信雄氏から依頼があった。編輯子の希望は藤間さん自身に筆を執って貰ひ度かったらしいが折角遥々慰問旁々休養に來られた筈なのに師匠は非常に忙しさうなので一應諦めたと言ふ。

藤間勘須磨に就いて書く人は他にあらうと思ふ。私は其の器でもなければ適當な人間でもない。何故かと言へば第一師匠の舞臺を餘り多く見てゐないからだ。然し斷ってと頼まれたので引受けた譯である。

師匠とは何度も會った。面白く聞いた談も隨分多い。舞踊と芝居とを繞る體驗談の中には泪なしでは聞き得ない逸話もあった。凡ゆる社會を渡る一般人に取っても貴い處世訓となるやうなものさ

へも窺われた。洵に華かで豊富である。到底一回に纒めて載せることは出來ない。

十一月雛の締切り日も既に過ぎ去ったさうで　急がなければならない。それで　今回は表題を「勘須磨を訪ねて」として歓迎の意味を含め　私以上に師匠を知らない人の為に　紹介の筆を執るに止めることにした。御了承を乞ふ次第である。

師匠と讀者に一言‖一切敬語を附しませんでした。悪からず！。

（翠川　敏）

× × ×

羅府にオリンピック競技大會が開かれた頃であった。聖林のパラマウント會社が　セヰルビヤ・シツドニイとギヤリイ・グラントを主役に　プツチニイをオペラに仕立てたダビツド・ベラスコの舞臺劇「お蝶夫人」を映画化したことがあった。私は　紐育から用を持って來たのであったが肝心の相談相手（伊藤道郎）はテクニカル・デイレクターとしてパ社に傭われ　スステユデイオ通ひに夢中なので話を後に廻しお相伴格で撮影所へ日参と洒落ざるを得なかった。

お蝶夫人に扮したシツドニイは　舞踊の素養を有たぬ役者である。線が固くて一々の手振りに力の籠つた冴えが見えない。誤魔化した調整の美は求められるにしても　日本の女性が具つ清楚とか典雅な趣を浮べる場面を撮るのには　是が非でも「ダブル」を使用しなければならなかつた。

道郎に「ダブル」を振られた可愛らしい前髪姿の二世娘が　多勢の中から抜かれて行つたのを仄かに記憶してゐる。今度　師匠と會つて「あれは私でしたよ」と言はれ　唯々茫然とならざるを得なかつた。と同時に　流石は道郎だと感じた。米國の舞踊界に最も多くの天才を贈つたゞけあつて　今更作ら慧眼恐る可しを思はさせられた。何故なれば　往年のダブルは　具備してゐた其れ等の素質を生命に磨き上げて眼前に現れてゐたから――藤間勘須磨に對して受けた印象である。

勘須磨は生來蒲柳の質（誤解されては困る）であつたさうだ。濱口家は歴記とした家柄　若し勘須磨が壯健な子供であつたならば　如何に好きな道とは言へ　踊りを習ふ機會は與へられなかつたであらうし今日の藤間勘須磨は生れなかつたに相違ない。凡そ　藝事とは縁の遠い

環境に育った人である。孰れかと云へば　舊弊で保守的な両親が　傳統を破り　愛しい娘の天分を認めさせられた蔭には　嚴格な親なればこそと思はれる慈悲に秘めた偉大な理解が光って見える。

清村師匠から舞踊の手解きを受けたが　間もなく中村友福の師導で羅府の少女歌舞伎に出演するやうになった。時代物の役と云ふ役を一通り勤め上げたので　將來のため是非とも本場で學び度いと考へ　母と同伴日本へ向ったのは一九三四年の九月であった。船が散港の岸壁を離れやうとする刹那　嚴父嘉郎氏は「さあ　シエークハンドしませう。可いですか　今度あなたが日本に行くのは　お父さんの希望ではなく　あなた自身の願ひですよ。若し墮落したならば　其れはあなたの罪ですよ。お金のことは決して心配する必要はありません。お父さんは誓ひます　譬へ四洗ひをしても學費は充分送りますから　どうか立派になって歸って來て下さい――」と説かれたと云ふ。

日本には幸運が待構へてゐた。六代目尾上菊五郎を校長に頂く　至難な俳優學校の入學試驗も首尾よくパスした。級友達は「アメリカさん」と呼んでゐたさうたが　唯のアメリカさんでなかったことだけは確かで

あつた。學校に入つたからと云ふて　先生達が一々手を執つて教へて呉れるものと思つたら大間違ひである。菊五郎は日本で最も忙しい人物の一人　餘暇なんかゞある譯がない。勘須磨の天分を見出したのであらう。自分の師匠で藤間流の家元五代目勘十郎に紹介したさうだ。明治から昭和に掛けて日本が生んだ偉大な女性の中にも指折られた師匠である。仲々どうしておいそれと弟子を取る人ではない。當人は氣付かなかつたらしいが　幸にも勘十郎は　温習會を覗いた砌り　アメリカさんの唯物でない閃きを見貫いてゐたので　心好く門下に入れて呉れた。この物質のみでは到底求め得られない幸運に惠れたればこそ　延いては西川流の曹子しげる師匠の門も潜ることが出來　昭和の名人からも直傳を授けられたのであつた。

勘須磨は安易な途を歩いて來た人ではない。荊棘を切開いて修業した幸運兒である。幸運兒と云ふ意味は　藝に勵む者に取つて　最も不可欠な素質を失つてゐないからである。日本に於ける苦心談を語る中からも曾て　辛かつた思ひ出すらも窺ふことが出來なかつた。其處には　眞に藝の道に生くる者の純眞さがあつた。

私が師匠に投げた質問は――――

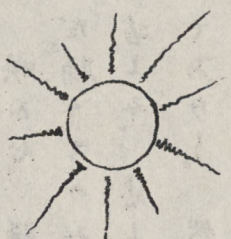
(一) 一番嬉しかったこと　(二) 悲しかったこと

(三) 男性に就いて　(四) 将来の希望

の四つであった。三と四の質問に對する答は紙上に發表する程の資料を得なかったのは遺憾であった。

舞臺は歌舞伎座　勘須磨は　家元松尾太夫の出語りで　常盤津「戻り駕」の與次郎を勤め　翌日　稽古場の蔭で　褒めた勘十郎の聲を小耳に挾んだ時が　一番嬉しかった刹那であったと述懐してゐた。師匠の述懐は　宛然一幅の繪卷物語が繰り展げられて行くかのやう　此身陶然として　暫し轉住所にあるを忘れしめ　恰も洛北は大徳寺の境内　紫野にあるかとも思わせるばかりであった。

紙面の都合で　今回はこれに止め　浪花の次郎作と吾妻の與次郎とが戻り駕に禿を棄せ　揚幕を潜って　花道七三から舞臺に掛り　與次郎に扮した勘須磨が　踊りに踊り狂って　相棒の次郎作を完膚なきまでに踊り伏せ　幕が引かれた刹那「我れ勝てり」と仕留めた愉しい談は次號に譲らうと思ふ。



美しい心

外川明

クリーム色のヴエニシャンブラインドを透して射し込む朝の陽光に、室内は明るく靜かだった。窓際でタイプライターを叩いてゐた小柄な丸顔の娘は、小聲で何か唄ってゐたが、何を思ひ出したか急にタイプライターから手を離してチエアに腰をかけたまゝ踊る恰好をしはじめた。

「サンデースクールでこんな踊りを教へるのよ。可愛いでせう。」

机隣りの他の娘に語りかけながら、両掌を胸に押し當てゝ首をかしげたり、両腕を上に伸ばして頭の上でピラミツト形を作ったり、又、鳥が翼を動かす時のやうに両腕を左右にひろげて、手を上下に動かしたりしながら尚も唄ひ續けてゐる。同じ室内に居る二人の娘にも、用事があってそのオフイスを覗いた私にも、少しのはづかしさも感ぜずに、一筋に日曜學校の子供達のことを想ってゐるらしい。

何と云ふ無邪氣さだらう。何と云ふ和やかな雰圍氣だらう。「美しい心」とはかうした時のこの娘の心などを云ふのであらう。私はこの娘が果して他の二人の娘より優れた頭腦の持主であり、又仕事の上の技倆も勝ってゐるか否かは知

らないが、少なくとも美しい心の持主であることだけは信じられる。

美しい心、美しい心、私も美しい心になりたい。假令大きな仕事は爲し遂げ得なくとも、美しい心だけは失はずに生きてゆきたいと希ふ。それにしては餘りにも苦惱と煩悶と卑懦のみ多くて汚れたる私の心であることよ。

私の好きな吉田絃二郎先生の感想集の中に次の如うな一節がある。

「頭のいゝと云ふこと、それもありがたいことである。羨しいことである。けれども心の美しいといふこと、それこそ最もありがたいことでなければならぬ。

惡魔も時として賢い頭を持つことが出來る。

美しい心のみが神のものであり、人間のものである。

頭のいゝだけでは智慧は生れない。

心の美しい人のみが智慧を持つことができる。

心の美しい人のみが、盆の上の林檎にも生命を感じ、森の中の魂にすら或る物の聲を聽くことができる。」

唄ふ心、踊る心、みんな美しい心ではあるが、人生の日々は、たゞ唄ひ、ただ踊つてのみは居られない。この可愛い娘も、やがて惱む日もあるであらう。苦しみ、悲しむ日もあるであらう。處女の美しさのみでは生きてゆけないことであらう。然し私は祈らずには居られない。乙女よ、一日も長く美しい心を失

はずに、否、永遠に美しい心を失はずに生きてゆけ！と……。

眞の心の美しさは、たゞかうした優雅なすがたのみを云ふのでは勿論ない。荒れ果てた砂漠の中にも探せば立派な寶石がある如うに、このつまらないとのみ人々から云はれてゐるキャンプ生活の中にも、どれだけ多くの『美しい心』が交流してゐるか知れないのである。涼み臺の上で人の悪口を叩く代りに、總ゆる角度から『美しい心』を探して拾ひ集めて見るのも面白いと思ふ。

『誰に感謝されやうとも思つては居りません。唯自分として、今日一日と云ふ日を有意義に過ごしたら満足です。』と云ひながら便所の掃除をしてゐる人があるといふ。何と云ふ地味な『心の美しさ』であることよ。この人の外にもかうした謙遜な氣持で、人目に立たない仕事を、黙々と續けてゐる人々がどれだけ多くあるか知れないのである。給料の事など考へずに、職場々々に各自の本分をつくしてゐる人々はみんな美しい心の持主である。

思出の深い去年の十月の雲多き日であつた。

『片肺のない××牧師でさへ、あれだけ私達の為に働いて下さるのだもの、私も少しばかりの病氣に負けて、何もせずにゐては勿體ない。せめてブラックの為に血洗ひでも為らせて頂きます。』と云ひながら、可弱い老軀を押して働き、働き場で腦溢血を起して殪れた××夫人の心の美しさには、どれだけ多くの人々が魂を打たれたか知れなかつた。みんな〈こんな氣持で働いたなら、私達

の集團生活も、もっと〳〵住みよくなってゐただらう。

舊師の長い病氣を心配して、遠い他の收容所からわざ〳〵看護にやって来た琵琶の弟子夫婦があった。女同志はあまりの嬉しさに少時の間抱き合って熱い涙にむせび泣きしてゐたと云ふ。誰でも泣かずには居られないだらう。抱き合った。結び合った師弟の『美しい心』である。

收容所で最初のクリスマスに、全米基督教聯盟を通じて送って来た贈物を貰った私の十歳になる男の兒が、その悦びを拙い文章に綴り、その贈物の主に御禮狀を出したのが緣となり、遠いメリーランドのバルチモーア市に住んでゐる白人の少女と文通を初め、今はそれに姉娘までが加はって、三人でしきりに手紙を交してゐる。そして時々は雜誌、オモチヤ、キャンデイ等を送ってくれたりする。誠に微笑ましい幼き者達の『美しい心』の交換である。

『昨年は山で御世話になりました。あなたも作って居られるかも知りませんが、こんな物を拵へて来ましたから御兄弟で分けて下さい。』と云って、アイオンウード（鉄力木）のナイフとヘラとを持って来てくれた老人があった。考へて見れば山で一緒になったのは一年以上も前のことなのに、其の時少しばかり手傳った事を覺えてゐて、かうして此處の紀念品になる物を持って来てくれたのかと思へば、その人の心の奥床しい美しさに感激せずには居られない。

此外數へ切れない程、『美しい心』はあちらこちらに見出すことが出来る。

慰め合ふ心、助け合ふ心、捧げ合ふ心、感謝し合ふ心、これ等の美しい心の結合によつてのみ、私達の集團生活は完全に救はれるのである。

總ゆる美しい心の核心となつてゐるものは『愛』の一字であると云ひたい。然し、基教で『神は愛なり』と云つてゐるその『愛』を、釋迦は煩惱の中に入れてゐると云ふ。何故だらうか？。愛々々と口に愛を唱へながら、小愛、盲目愛の爲に、私達はどれだけ隣人の心を傷けてゐるか知れない。そして、個人主義的不公平なる愛の爲に社會は益々住み惡くなり、それが因を爲して、人類の歴史は幾度となく血で塗られて來たのである。想へば愛は最も尊く、亦最も危險なものである。そして、釋尊の教へにも肯けて來る。

不斷の反省に正しく愛を整へる時、自ら『美しい心』は生れて來るであらう。假令、聖人、偉人になり得なくとも、せめて美しい心だけは失はずに生きてゆきたいと想ふ。

誰もゐない午後のオフイスの靜けさの中に、私は飯粒を板切れの上でねりつぶして糊を作り、バラ〳〵になつて戻つて來た古本の表紙を、カーゼを用ひて修繕してゐる。曾てこの本を讀んだ時の自分の悦び、次から次へ廻して讀んだ無數の友人知人の懷しい思出、そしてこれからも讀むだらう多くの人々の喜ぶすがた等を考へてゐると、心は何となく和やかになつて來る。こんな時の私の心も、美しい心と云はせて貰ふことが出來るであらうか？。（一九四四、九、一五、夜記す）

圍碁

野田夏泉

今は物故したが私の知人に中井といふ老人が居た。私の祖父と言つてもよい年輩の人で、圍碁がトテも好きであつた。この老人と同年輩格好の人で竹原といふ人が中井老人とは無二の親友の間柄であつた。同郷出身の二人はよく共に飲み、共に語つてゐる處を見かけた。竹原老人も圍碁にかけては三度の飯よりも好きで碁を打ち出せば朝から晩まで續いても止きうとは言はぬ変りものでもあつた。

從つて竹原老人が中井家を訪ねることは、その表面はともあれ、中井老人へ圍碁の挑戦に出掛けるのが目的であつた。中井老人も竹原老人が訪ねて呉れることは、この碁仇（ごがたき）を心待ちに待つて居る時の方が多かつた。自然竹原老人が訪ねさへすれば、時に関係なく、其の仕事に関らず『一石來るか？』と微笑と共に挑戦するのが常であつた。

其の頃の私には圍碁の事は一切解らず、かうまで面白いものかと不思議にさへ思へたのである。今から考へれば中井老人の方が竹原老人よりか一二目上の碁であつたらふことが思はれる。竹原老人は子供もなく老人夫婦で米人家庭の

タツクとして働いてゐるとのことであつたから、この訪問圍碁戰の日は、その休日か仕事が済んだ後の夜の夕イムのやうであつた。

二人は早速パーラーで石をもて遊びながら前回の勝者が誰であつたかを論議してゐるらしく、解決までにも相當の暇を費し、戰前既に風雲急なるを思はせる樣子も時々あつた。二人共中々の負け嫌ひで、碁面に對してのみ親友でもなく同郷でもなく唯仇同志と言つた氣性も寧ろ不可解とされる位であつた。それでも時には一日中パチリ〳〵黙々として碁に耽り、『ソレお茶を出せ』『ソレ水だと中井夫人や中井家の娘等によく面倒をかけて居た。又或る日は二人ともよく喋り『如りとお出たネ、其の手は桑名の燒蛤』パ　リ『ハハア、さうお出てか？。斯うすりや一眼か、大石もお陀佛かナ』などゝ言つてる中『アアーさうかそりや待つた』『今更待つたは卑怯ぞ』『いやこの石や死んでは碁にならん』『碁にならなけりや投げろ』『待て』『待たぬ』でとう〳〵喧嘩別れ、『もう二度と來ぬ』『二度と打たぬ』プン〳〵して竹原老人は座を蹴つて歸ることも屢々あつた。それでも次の休日にはケロリとして、直ぐにパチリ〳〵始めるのであつた。

私はこの二人の圍碁心理なるものをどうしても理解する事が出來なかつた。屢々私もポストンに來て暇があるまゝに圍碁に耽る日が多くなつた。勿論自信を以て碁を打つと言ひ得る程度のものではない。唯石を並べるにすぎないものではあるが、碁に對する心理なるものがよく解るやうな氣がする。

『碁仇や　憎さも憎し　又恋し』の句の意味も畢竟中井老人等の心境ではあるまいかと思ふ。然しこの老人等が圍碁の主體をなす、圍碁精神から遠く離れて居たことに氣がつくのである。

碁道には禮儀は必要である。禮儀を欠く圍碁は碁道精神を失するものであると言ふ事を考へさせられる。唯勝たんことのみに碁を遊ぶ事は碁を邪道に導くより外に得る處がない。碁は修養の一助である。勝つて高ぶらず、負けて心の平靜を失はず、敗因を吟味して次回に其の轍を踏まざらむ事を期してこそ眞の碁道に添ふものである。

人生行路上交際の道は圍碁將棋と異なる處なきことを、つくづく思ふ。智に於て、德に於て、年齡に於て吾以上と氣がつけば、一目なり、二目なり置いて樹り、二目の處は用心して三目置いて其人と交際して行けば誤解もなく、失敗もなく、至つて平隱に交際して行けるものである。石を置き、又吾以下と感じた時は石を落して樹るだけの心の修養が肝要である。所謂バツを合はすと言ふ事は處世術の秘訣でもある。徒らに強がるばかりでは人との交際にはうまく行くものではない。禮法は人界の筋道であることを忘れてはならない。碁盤、將棋盤の筋道を無視しては勝負にならない。

中井、竹原兩老人の碁の欠点は此の人界の筋道を忘れての結果ではあるまいか。

（終）

三人の白拍子

〔無名歸朝者の日記帖より〕

翠川敏

序

七年前であつたか　これと同じやうなものを「羅新」の文藝欄に載せたことがあつた。無名歸朝者が市村座を訪れたのは　一九二六年の二月で　日記の中に出て來る　片岡仁左衛門（先代）尾上梅幸　は共に過去帖の人となつた。時効にかゝつてゐると思ふので　人物は凡て匿名を用ひず　態と本名を使つた。

二長町の芝居

東京に未だ江戸の芳香が匂われた時代　芝神明の祭には華の纒に　め組の木遣りが謡われ　俳人が朝風くお茶の水を通りしなに　杜鵑を耳にして一句あつた時分である。昔噺になるが　菊五郎（六代目）や吉右衛門が若手呼ばわりされた頃であつた。　田村將軍（仇名）が木挽町（歌舞伎座）を尻目にかけて　雄々しくも二長町に立籠つた折り　若い芝居ファンの血を沸かしたこの市村座は往時偲らした櫓の俤もなく　侘びしい震災の餘燼を受けて　今ぢやバラック建の殘骸を止めてゐるに過ぎなかつた。　大正も押し詰つた如月狂言の初日であつた。久し振りで故國の土を踏んだ歸朝者は　恰も昔の戀人と會つたやうな思ひで

先刻より淋れ切つた小屋の揚幕と舞臺の中邊りから　今月は特別加入の恐らくはこれが最後であらう――仁左衛門の「石坂堀原」に見惚れてゐた。するとそれは眞當に偶然の出來ごとであつた。花道を挾んだ七三あたり　雛壇に陣取つた女が　舞臺とは方角違ひの平土間へ送つてゐる視線と出つかわしたのである。

こゝは外でもなく　河原ものゝ芝居社會を今日云ふ所の劇壇の標準にまでせり上げた明治の大興行師でもあつた初代守田勘弥の片腕と許され　新富座の全盛期から帝劇黄金時代の出現に至るまで　男と智謀を劇界に謳われた田村成美氏が　贅六（松竹）の輩が帝都の劇界を牛耳り始めたのに業を煮やし　若手連中を率ゐて難を避けた孤城なのである。　この社會では馬鹿らしい程　口喧しい風習の家柄格式に一歩を讓る吉右衛門や東藏（今の大谷友右衛門）が　今の圓熟の域へ達し得られてゐるのも　勿論　天分もあらうが　一に大田村の指導のよろしきを得た恩惠の賜物であつた。　明治初年に渡日したハワイ國王やグランド將軍の招待劇　井上邸に於ける明治大帝の御前芝居を始め　幾多の光彩劇界史に垂れた大田村にも大往生の日が迫つた。臨終の床に馳せつけた菊吉の両優が手を握り合つて恩人の後継者田村壽二郎氏の行末を受け合つたと云ふエピソードは　甚く當時の世人を感動させたものであつた。

實に意表外の報道が傳わつて來た。それには已むに止まれぬ色々の事情も手傳つたのであらうが　故人の一周忌を待たずに　吉右衛門兄弟（時藏）と三津

五郎は松竹へ身を賣り　勘弥（先代）は帝劇へ走ったのである。このニュースを米國に在って受取った時　経緯を知ってゐたゞけに何か暗い想ひに襲われたのをまざ〳〵と覺え出して来た。

中幕を控へた幕間　十年振りで菊五郎を樂屋に訪問すると六代目の眼には泪が光った。それは　音羽屋十八番ものに算へられてゐる新所作事「身替り座禪」や「棒しばり」等を書き下した岡村柿紅氏をよく知る歸朝者が　故人の昔を偲むだ爲ばかりではなかった。素人としての寺嶋幸三は株式會社市村座の專務でもあったが事實上の社長で　身に餘る負債の重荷に足掻く座主小田村を人間にするかしないかの瀬戸際に立ってゐたのだ。當局は何時までもバラック小屋の興行は許さないし　與へられた暫しの期間にどうしても再建築しなければ男が廢るし　彼も男一匹　四面楚歌を聞きながらも　猶枯木に咲く花の奇蹟を待つ竟氣地が　燃えて光った泪の中に見貫かれたのであった。曾ては葭町で左褄をとり　春敵公と矯名あった勝利が正妻に納ったが　實子がないので丑之助を養子に迎へてゐるのに　合部屋の梅幸が「丹那　あっちや今月は　ほんまの甥坊が初舞臺しやあすので　丸の内と掛持ちでさあ」と挨拶したので　訝かしく思いながらも一の杵に急き立てられ　名残り惜しくも再會を期し　男衆に送られ樂屋から出やうとすると　擦れ違ひに粋な女が入って来たが　チラリと睨まれたやうな氣もした。

大松島屋一世一代の「石切梶原」に聊かボウッとして喫煙室に行くと　思ひ掛けなくも雛壇の女と向ひ合せに座った。帶の締め方で襞のそれかと頷かれる出入りの藝者から慇懃に扱われてゐるこの年増は　大方柳橋あたりの姐御であらうと獨り決めにしてゐると――氣のせゐか見守られてゐるやうに思ふが――米國歸りの風來坊なんかを知って居る譯もないし　誰かとの感違ひだらうと思って居た。二番目は六代目の「累手組助六」兄の梅幸が揚巻で附合ひ　仲の町の場面で菊五郎の實子だとも云ふ「右近」が初舞臺を務める仕込みとなってゐるらしいが　幕を引く前に長ったらしい口上が述べられることになってゐた。喫煙室は空っぽになりきうだし「まあお附合ひだ」まゝよと立ちかゝると　出し抜けに呼ばれ　吃驚して立ち上ったは可いが　たゞ凝視するばかりで云ふ術を知らなかった。先方も二の句が継げない。その瞬間　頭の中を何物かゞ驀地ぐらにひた走った。見直させられると　其處に棒立ちとなってゐたのは　忘れもしない金春元の七人組の光一　君太郎の年を経た容姿であった。

三人道成寺

大正四年は王政復古以來　初めて同胞が享有した盛儀　大正天皇の御大典に聖壽万歳を祝ふた年であった。

岡村柳紅氏を主管とする玄文社の雜誌「新演藝」は　記念の標として破天荒な案を練った結果「東都名妓競演會」と題し　東京各區の花柳界から所作事を

それ〳〵出させ　歌舞伎座で優演賞を競わさせることゝなった。當時故國は好景氣の絶頂にあって　成金大盡の徹底した素晴らしい肩の入れ方は　意地に生きる花町の顯氣連を隨分と喰らしたものであった。別けても下町好事家の話題の中心は　その日の白眉とならうと噂されて居た巴家の八重次（今の藤蔭静枝當時永井荷風夫人）が　烏森から「山姥」を踊るのに對枕して　金春から出る菊三外の君太郎　竹の家の小奴　新叶の音丸の「三人道成寺」白拍子の評判に集ってゐたが

年も師走に入り　催物の後始末も一段落したので　一先づ京都に移った父と會って宿題を解決する為め　それと知ってか周圍の取巻きから抱かれんばかりに神戸行の列車に乘せられて了った。　その夜　東京驛の歩廊に競演會で一番世話を焼かさせた見送りの連中と混って　三人の白拍子の顔も見受けられた。

それから　十年の月日が流れて廻り合った此日の麗人には　往りし白拍子舞神の面影は微塵だに見出せない

舞臺では右近の初舞臺披露の口上が始まったと見えて　六代目の聲音が聞こえて來た。「これに控へまするは　俘めの――皆々様の――甘へまして――何卒行く末ながく――」　しーんとした場内に　七代目と呼んだ見物さへもあった。黙止しばし　打ち震ふ指先きに思はず數島を灰に落した下向きな麗人は　その刹那　世界中の最も惠まれた女として　喜悦の絶頂に立ってゐたのである。未

來の箱五郎　尾上左右の實の母であつた。

築地の夜

震災で根城から焼き出され　一時は道玄坂くんだりまで落ち退びた三人の白粉子は　逸早く元の塒に歸つて　今はそれ〳〵頭の冴えた身の振り方をしてゐた。故國舞踊界の名花花柳壽美は小奴の今日の姿であつた。音丸は清元延壽太夫の曹子榮壽太夫に嫁いでゐた。

電話で寄つて來た十年前の古顔に取り卷かれる中にも　反面に生じて過ぎ去つた惨たらしい人の変遷の身上が思はれ　暗い氣分に襲われて仕様がなかつた。三人のパトロンの中の二人の今日の状態であつた。三菱に買收された今村銀行と高田商會の没落とが　それを外側から意味してゐる。

思出につきない談の中に　築地の夜は更けて行つた。萬感交々到り　遂には耐へられないやうな苛々しさをさへ覺えたので　悪止めを断つて光淋から外へ出た。其處には河東節や歌澤を織り込むで　鏡花や萬太郎がものした作品よりの情緒とてもなく　曾て　亡び行く江戸の風情を築つて　一夜の清興を恣にしたずうつと後の世の人の趣さへも窺ふことすら出來なかつた。

茫然と過ぎた十年　震災と云ふ事實によつて劃された時の移りと物の変り――歸朝者の感受性を打つものは　亜鉛に圍まれた町に蠢めく力強い復活へのリズムだけであつた。（終）

時代に浮びあがる者

曾我部了勝

バサツ、と形容しがたい音をのこして、生首が落ちた。赤い夕日が地平線の彼方に沒しやうとしてゐる事も、あたりの雜音も、私には無感覺だった。唯、バサツと云ふ音が私の耳に響いた時、人の一生が終りを告げ、生ける者の如く血潮だけが迸しり流れてゐた。

事實、目を開いてこの光景をながめ得るだけの度胸は並々で出來得るものでない。私の心臟の血が一度に流れ出てしまった樣に、私自身蒼白になって行くのを感じ、ガツ〳〵と身震ひするのをどうしても禁じ得なかった。

宵闇の中の、うねう〳〵とうねった長い路を、私は焼き付けられた樣なあの場の光景におびえながら、誰とも話をしないでとぼ〳〵と歩んだ。誰からも話しかける者もなかった。むしろ好奇心にひかれてやって来た自分をおろかしく、卑下する氣持になるのであった。不潔な溝からムツとする臭氣と、道路の上の馬糞が土塵と共に鼻をつく。それが貧なものでかうした時には、もつと臭氣が我身に泌み込めばよい。馬糞よ土塵よ我身をうづめてしまへばよいと考へる。

學校を卒業すると同時に、教授の世話で赴任した。砲煙がまだどこかでくすぶつてゐる時代と所でおこつた出来事である。頃は零下三十數度の寒さが終りをつげて、春の訪れが近くに感ぜられる折であつたと記憶してゐる。

家に歸つてから、夕食が喉を通らない。床に入つても眠ることが出来ない。あの場の光景が焼き付いてゐて目が冴えかへつてくる。次ぎ〳〵と考へが湧いてくる。ムクツと起き上つて私は日記帖に次の様なことを書いた。

『時代だ！　時代だ！

時代と云ふものが大きな変化を吾々の上にもたらしてゐる。

多くの人々は時代の変化を、當然すぎる程知りつゝも無頓着ではないだらうか。

或る人は、時代の変遷を知りつゝも、自分の都合のよい時代を作り出さうとして、かへつて苦しい境地を作らうとしてゐるのではないだらうか。

さう言ふ自分も、勿論時代の変遷に付いて鋭い觀察力もなければ、又時代を立派に生きぬく自信にも乏しい者である。

だが私は山嶽に湖邊に仙境に、己を獨り置いて、塵世と隔離した生活に決して憧れはしない。

むしろ、自信がなくとも、臭氣と馬糞と土塵と殺戮にまみれながらも、時代と勇ましく闘ふ所に、時代を泳ぎ、時代に浮び上る事が出来得ると信じてゐる。』

（一九四四・九・八）

刀の話

谷川江浦草

一体日本國中に散在してゐる刀劍の數はどの位であらうか。正確なことは判らないが新古刀を合はせて約六十萬振と言ふのが通りになつてゐる。その中國寶に指定されてゐるのが約四百四十振であるから國寶刀の權威も想像出来やう。

これらの國寶刀を時代別に見ると全部が古刀(慶長時代以後を新刀と稱す)に限られそれも特に平安朝と鎌倉時代の作刀で占められてゐることを見ても如何にその時代が技術的に優れてゐたかゞ判るのである。それ故日本刀の歴史は平安朝に始まり鎌倉時代に終ると言つても決して過言ではないであらう。その建前よりこれら両時代に重点を置き刀劍史と言つたものをこゝで一まくり素描して見たいと思ふ。

神代及び上代の刀は近時考古學の發達につれて段々と瞭らかになりつゝあるが、各地の古墳等から發掘されたものを見るに殆ど支那の刀と大差なく平造り(切断面▼)の直刀であつたことが判る。尤も支那は銅劍が主であつたが當時の江南地方にあつた鐵劍の輸入品ではないかと言はれてゐる。その特徴は古事記などに十握の劍などゝ記してある通り五尺に近い長劍であることだと言へやう。

奈良朝。この時代は依然として直刀であるが造りは切及造（切断面▨）より小鳥造（切先が両刃。平家重代の小鳥丸がこの造り）となって可なり進歩して来てゐる。鋭利さも加って来た為、刀の重みで切る必要がないので次第に小振となってゐる。名工としては大和の天國。豊後の神息が記録に残ってゐるが信憑するに足る有銘作はないと聞く。要するにこの時代も唐太刀が舶来品として幅を利かせ唐様太刀と云ふ模造品が可なり作られてゐる。

平安朝　今日、日本刀が本當に誇り得る特色を持つに到ったのは實にこの時代からである。平安朝から次の鎌倉時代を以て日本刀は殆ど大成され名工の輩出は實に百花撩乱の趣があった。その先驅者として燦然たる光芒を放った名工は伯耆の安綱であることは何人にも異存のない所であらう。彼の刀は全て鎬造（しのぎ）（切断▨）の湾刀即ち吾々が今日普通に見る刀の形を完成させてゐる。彼の作として有名なのは『童子切安綱』（松平子藏）と稱される名刀で頼光が大江山で酒顛童子を切ったと云ふ所からこの様な名稱が附されてゐる。平造、切刃造よりこの鎬造に変化したことは刀に一層の美觀を添へると同時に鋭利なる武器としての躍進的進歩を来すものである。以上三つの切断面を見ても判る如く、原理的に楔と同様の理由に依り鎬造が最も有利な構造を備へてゐることは判断出来やう。これは天慶の乱、前九年、後三年役の實戰を基礎として發見された原理と思はれる。これと同時に刀が直刀より湾刀に変ったことも一層、刀を鋭利

にしてゐる。この二点に於て初めて日本刀が上代刀と異る特色を示したことは特筆すべきことである。

この時代の刀工の分布は大和、山城、備中、備前、薩摩、伯耆などである。前述の安綱以外にどの様な名工がゐたか二、三思ひ出す儘に書いて見やう。

謡曲などで有名な三條小鍛冶宗近はこの時代の名工である。その作刀としては現在徳川公爵家所藏にかゝる三日月宗近が國寶中に光つてゐる。宗近は山城であるが薩摩では波平行安、備中は青江守次、備前は包平とそれ〴〵直系を擁して名工の譽れが高い。特に最後の備前包平の如きは古今の名刀として空前絶後とまで稱せられる大包平を後世に殘した点に於て特に記憶される。この刀は備前池田家に傳はる三尺に垂んとする逸品で勿論國寶として指定されてゐるが本来如何なる名家、大家に保存されてゐる名刀と雖も、疵れもなく無疵であると言ふのは稀有とされてゐる程であるのに、この包平のみは實に完全無缺、愛刀家の絶讃を惜まない神品である。時價に論ずることは出来ないであらうが、現在は恐らく何百万圓と言ふ價を呼ぶことは間違ひあるまい。この刀が池田家に入つたに就ては面白い話がある。

それは丁度彼の有名な熊澤蕃山が新太郎光政の招聘を受けて藩の財政整理に當つてゐた頃のことらしい。光政がこの刀を購ふために手許金より莫大なる出費をしたところ、蕃山は直に君前に伺候して「君はこの刀で今や漸くその緒に

就かんとする藩の政復興の新芽を切取らうとなさるのですか。』と手痛く直諫した。名君の聞へ高かつた光政も流石にこれには参つたが『余は一生の間この刀以上の贅澤は決してしないことを誓ふから、どうか今度だけは許してくれい。』とベソをかいて頼んだと言ふから面白い。その樣な經緯で池田家へ入つてゐるだけに手入れが見事であつたらうことは想像出來る。

鎌倉時代。驕る平家は久しからずして西海の藻屑と消へ去つたが前車の覆轍を警むる鎌倉幕府の頭梁右兵衛頼朝は治にゐて乱を忘れず尚武の氣は全國に漲つた。これより約百五十年の幕府治下に於てはその類を見ない程多數の名工良工を輩出してゐる。その原因ともなるべき事件が二つある。

第一に後鳥羽上皇が北條討伐の爲諸國の名工をお召しになり夫々月番を定めて刀劍を鍛へしめ給ひ御自らも菊の御作として今日に残る銘刀を焼刃遊ばされた事である。全國の刀工が月番の禁にあづからんとして如何に研磨を競つたか。そこに著しい作刀技術の進歩を示したことは疑ひない事實である。第二に蒙古の襲來である。弊國一致戰備を整へ怒濤烈の大軍に當らんとした當時の刀工が揮身の努力を傾注して作刀した事も良工の現れた大きな原因と言つてよい。

刀工の分布は今や完全に全國的となり幕府の所在地鎌倉には山城より粟田口國綱備前より國宗、助眞が下向して、末期には粟田口を師とする有名な正宗、貞宗が出現してゐる。この正宗に就て一言したいことは名刀と言へば正宗、正宗

と言へば名刀と言つた樣に正宗はさながら名刀の代名詞の如き觀を呈してゐるがそれは幾分正宗を過大評價してゐる氣味があると言ふことである。勿論正宗は古今の名工には違ひないが、彼に比肩し得る名工或は彼以上と稱せられる名工はこの時代だけでも枚擧に遑がない程である。國寶刀四百四十口中、正宗は五口その中三口は短刀であることは前にも述べた通りで之を以つてしても如何に多數の名刀が他に存在してゐるかゞ窺はれやう。勿論刀の正は山城、備前或は栗田口などで、正宗は奇に走り常套を脱して別に一家を成してゐる爲、或る一部の刀劍家には相州物は良く言はれないことは事實であるが何れにしても古今を通じての第一人者と稱することは出來ないであらう。この時代の名工としては越中御、義弘、備前の福岡一文字、吉岡一文字、筑後の三池典太光世、栗田口吉光、來、國俊、志津兼氏。當麻國行等は著名である。

吉野朝。この時代に至つては漸く技術も衰へを見せ所謂だんびら風の野太刀が流行り出した。これは吉野朝時代の繪などによく見る背負太刀と稱せられる至極豪壯雄大な太刀で、今迄の優雅な品位ある太刀姿はこの時代を境として影を絶つに到つた。

室町時代。この時代はどちらかと言へば粗製濫造の時代で良工も少くはなかつたが、概して作刀の多い割合に振はなかつた時代である。何故粗製濫造が行れたかと問ふ人にそれが當時の政府の方針であつたと言へば奇異に感ずる人も

あらうが話は斯うである。

倭寇と言へば歴史上、誰一人知らぬものなき日本の海賊である。日本國内に志を得ない當時の荒武者連がこの倭寇となつて日本刀一本腰にブラ込み八幡船に乗じて支那沿岸を荒し廻つた時には明の當局もホト〳〵手古摺つてしまつた。そこで明では日本内地の刀さへ買ひ求めたら倭寇も武器がなくなり弱つて行くに違ひないと足利幕府に對して日本刀の大量購入方を申込んで來た。幕府としては刀の良否に關せず相當の値で買つてくれるといふのであるから文句はない、全國の刀工に命じてドシ〳〵刀を作らせた。何のことはない刀鍛冶或金が澤山出來たゞけの話で國内では相も変らず註文打が多數鍛へられこれら不逞の徒は少しも不自由しなかつたと言ふから度肝である。この輸出向は数打と稱せられ同じ刀工の作でもその値段に於て注文打とは格段の差が設けられてゐる。併しこの弊風の爲に作刀技術は著しく低下し名工と稱せられる程の者が一人も出なかつたことは残念なことであつた。

千子村正はこの當時の良工であるがこれが何故妖刀としての名聲を得るにいたつたかについては次號に書いて見たいと思ふ。

俳句

出屋天眠

拂へども逃げ足おそき秋の蠅

外つ國に佛は淋し墓參り

大セラは美りて高し渡り鳥

谷川の水の澱みや赤蜻蛉

雜斷片想

岡本稔

柔道と云ふ武術は、自分の不利の地点をそのまゝ自分の利用すべき足場として相手を投げるのである。即ち向ふから突いて来るとか引張り込むとかして来る。衝かれるとか引張られるとか云ふ事は自分が重心を失ふ危殆の時である。それをそのまゝ利用して、引っぱられゝば敵のふところに飛び込み、突かれゝばその力を利用して敵の姿勢を引落す。柔道の試合には相手が技をかけてくれる刹那が勝利の好機會を生むことが多いのである。鐵柵生活も衝かれた技として幸運の足場になし得る返えしの技の出し處として考へ直せば自ら新道の開ける譯である。

幸福と云ふものは裕福な家庭に生れ何の勞苦なしに一切の必要品をのべつに與へられると云ふ樣なものを云ふのではなく、亦一夜成金で乘行旅行と罷り出る輩を云ふのでもない。しからば幸福とは自分自身の立派さを自分の力により て正しく強く創り出すことである。さればかゝる意味に於ての逆境は吾々各自を鍛えて吾々の中味である眞の力を出さして呉れる絶好なるチャンスであるものとして、亦莞爾として微笑せざるを得ん。とはいへ徒らに逆運に親しむを欲

せざるは無論だが、只再起大成の念に敢然燃え上り度い氣持ちと、それにつれ一種の幸福感も確かに覺えて居る。

有言實行と云ふ言葉に関心を持つ様になつた。約束の前に熟考を重ねての断は比較的實行が伴ひ亦責任的であるが、不言實行の方は或る場合に責任の回避に成るが如き事實を往々見る。一定量の尺度を與えられ物事を計る時の結果は自他共に満足的であり効果的であるも、自分勝手に自分の持つ尺度にて他人を計り誤算を生じた揚句が責任の逃避と来ては勝手も甚だしい無責任と云はねばならない。後者の之に匹敵するは申す迄もないが、要するに徒らに軽擧妄動に走るを慎しみ、同時に有言履行頼まれ甲斐のある男に成らふ成らふと心懸けてゐる。

若輩の未だ學生時代のことである。偶々兄に餘分な小使錢の催促を友人の義理合にかこつけて請求した事がある。兄は注文通り早速郵送してきた。しかも御添書一本にはこんな文句があつたことを今でも覺えて居る。曰く『友人の義理は一應大切だ、而し親兄弟への義理はどうするか。』と少々薄氣味悪かつたが何亦何時もの通りだよ心配するねえ、でやつてしまつた。それから幾星霜たつた今日現(いま)の心境は申す迄もないことである。成程肉身の手近な處で義理も立てられない忘恩兒が、大きな處で社會國家に起てる道理もなからふと、徒らに蠻氣に勇み軽擧に贊し親泣かせは止めて、静に己を研(みが)くことにせんけりやならんと、せめてもの孝子の積りで居る。（一九四四年九月の宵）

行程三十分（偶感偶語）

矢形溪山

僕の宿から五ブロック歩いて。電車に十五分間、電車を降りて又五ブロック歩けば僕の働き先に着く。その間半時間である。

アパートの二重のドアを排して朝の外氣に觸れると、冷たいといふよりも、肌をさす寒さを感じる。一列に鬱蒼として綠を競ふた街路樹は、一雨毎に黃ばむで行く。両の拳をポケットに入れて落葉を踏む時、すっかり秋を意識する。早起きの鳩や雀は、庭一杯に雜草の中を漁って其日の稼ぎに餘念もない。此間岩永さんからの手紙に、「大きな鳥の棲む處にも小鳥が棲んでゐます。」と云はれてゐた事を想ふてみた。「法輪」に、「慎みて過去を念ふ事莫れ。亦未來を願ふ事勿れ、過去は已に滅し、未來は未だ到らず、唯現在有る處の法をこそ、亦當に思をなすべし。」と云ふ一節があった。小鳥は人間以上かなあ、とも思った。

十間ばかり歩むと、左手は空地で瀧車道と森を越えて、遥かにミシガン・レーキが鏡の樣に見えて、水平線から眞紅の朝日が昇る。正に一幅の画である。清少納言の「繪にかき劣りす。」と云ったのもこんな景色であらうか。日外このレーキの景色に見とれて。私は友人に「このレーキは眺望に、運輪に、用水に、氣候の調節に、大都市シカゴに大きな恩惠を與へてゐますよ。」と言ったら、友人は「だけど、このレーキ位汚い處はありませんよ。」と冒頭して言ひ聞かせる

のであつた。「第一シカゴ三百萬人の汚物は此池に排泄されて、それを食つた魚類が吾人の食膳に供せられる事、次で此湖水が吾々の日常の飲料水となつて居る事。」等であつた。さう思へば此處の水はポストンのよりも、もつと強く消毒藥を利かせてある。なるほど、物には反面がある。併し「循環すれば、天地萬物は、清淨に歸する。」と言ふから。」と僕は言つておいた。

次のブロックに進むと、毎朝きまつた樣に二人の女が各々養犬に用便をさせてゐる。この要りもせぬ肥料を庭に施される人こそよい面の皮である。一体自分のガーデンに糞尿させるのを嫌な人々が、何故隣のガーデンに犬をつれて行つて不潔の押賣をするのであらうか。思ひなしか此二人の女は僕の通る時に顔を反けてゐた。

不圖思ひ返して道を急ぐと、僕の乘る電車は今行き過ぎた。小娘をつれた黑んぼの女も僕と同じ樣に、乘り遲れた。小娘の頭はチヾレ毛を無理にひつぱりつけて、五ツ六ツに分領して無理に赤いリボンでくゝつてある。母としては中々骨の折れた仕事であるが、外からは変てこなものに見える。

カーが来た。乘つて見ると今朝はもう半分以上の人がオーバコートを着てる。夏の間殆ど帽子をかぶらなかつた男子も、半分以上は冠つてゐるのが目につく。高架鉄にのつてダウンタウンへ行くと、隨分ジロ〳〵私の顔を見る奴が居て小氣味の悪い事があるが、ローカルは半分は職場へ急ぐ黑人だから、乘心地がよろしい。前の席には小娘をつれた白人のお婆さんが、美しい娘ののび〳〵した金髪をちゞらせて得意さうに腰かけてゐる。多くの黑んぼの女はコテ〳〵油を塗りつけて、伸びぬ髪を無理に伸ばして結髪に努力したあとが見える。「全く矛

眉の多い世界だ。」と考へてる内に一ブロック乘り過ぎてしまつた。

店では優しく挨拶する女が輔道で會ふと、威容いかめしく無言のまゝで通り過すのもある。時局下の心理として僕は受け流しておく。尤もそれ以外に行つける方法は差當り僕の胸にはないのでもあつた。

I.Cの鉄橋をくぐれば五十五街のハイドパークである。此處では十五階、廿階のホテルやアパートがしら！きの風光を一瞥の處に、その偉容を空中に誇つてゐる。シカゴで數區域に別れた金權住宅の一部である。此住宅區域で四百餘、五百餘でアパートを借りてる人たちの中に、英語の不充分な歐洲から逃避して來た猶太人女の多い事に誰も驚くであらう。

平時に於て合衆國の黄金の三分の一、産業の七割五分を支配してゐた猶太人七百万は、此戰時に於ける活動で豫想以上の金を作つて居るであらう事が想像される。レモン一つ、ストリングビンズ一行買ふにさへ撰りに撰り、尚其上値切らねば買はない、根性に僕は愛想がつきた。小さい小娘でさへ金の事以外にはない。かくの如くして彼等は世界の金權を把握するのであらう。

行き交ふ群衆の中に美人といふものが少ない。彼等の服裝は立派で華美を極めて居るが、容姿の上に、會話の上に顯はれる彼等の姿は、アメリカ人に劣れりの感じが強い。彼等を顧客とするにあき足らずして去り行く働人は其數少なしとせない。勞働者の間に反猶太熱は驚く程高い。果して此問題は將來如何になつてゆくものか。米國人に言はせると、二代、三代の内に彼等も立派に米化するとの話ではある。

又、今日も五分遲れて働き先のドアをくゞつた。

（終）

沙漠夜話

中村正敏

八月の酷暑は流石にポストンぢや。金鉄も溶かし畫も夜も滿足に瞑られず痩せたのう。月が代つて幾分は凌がれるがまだ伸々。時に本名を素つぱ抜かれたのには弱つたのう。匿名で「沙漠夜話」と題し取り止めもない隨筆見たいなものだが、せめて欝氣晴らしに「民謡大會」でも開かれたらどんなものかと思つて、その心組で筆した積りであつたのに、「日米情話」と改題されて八月號に現はれたのには驚いたね。「日米情話」と題するならば、もつと書き樣もあつたらうにー。それよりも參つた事は自稱老人になつてしまつた事ぢや。本名を出すなら老人などゝ書くんぢやなかつた。知らぬ人は本當にするでのう。今更致方はない。之から老人で行かうのう。

△歴史煙滅の嘆

鷲津尺魔と云ふ人を知つてるかね、名前は如何にも恐ろしい見たいだが優しい人だつた。よく日米紙に健筆を揮ひ亦著書もある。六尺近い堂々たる体軀

で立派な容姿の持主であつた。今はもう故人であるが、ワシとは羅府のウエラアー街の古西豊龍棋院で度々烏鷺を闘はした間柄ぢや。其時分氏から幾度か、「歴史煙滅の嘆」と云ふ言葉を聴いたものだ。當時は余り氣にも止めなんだが、此頃どうした事が毎日この言葉が想ひ出され故人の影が髣髴として浮んで来た様。

此所で一寸一言して置きたい事は、今は已に亡き人の數であるが、古西豊龍翁の事どもぢや。加州の棋客で翁を知らぬ者は一人もなからう。アメリカに於ける圍碁のパイオニアである。東一街の支那料理三光樓の三階に片や豊龍碁會所片やビリヤード臺が据つて居た。ビリヤードの先生は體こそ五尺に足らぬ短軀だが、當時世界的斯道の名手松山金嶺其人で双方仲々旺んぢやつたね。今ポストン病院クリニックのドクター村上など錚々たる突手だつたのう。現三十五區の中村四郎夫妻なども盛んに突かれた方だが余り上達の見込は……アハツ……々々々。想へば二昔も前の事か。それからウエラア街に棋院を移し死ぬるまで棋道に盡された事は吾々後輩の忘るゝ事の出来ぬ感謝事ぢや。之に對し遥々日本棋院から感謝の意味も含まれて三段の免狀が下附されてゐる。このポストンで鼻を高くして居る碁の先生連中もみんな翁の薫陶を受けた人ばかりぢや。さて話は本筋に戻るが、

尺魔氏は在米同胞中稀に見る史家であつた。日米交渉の沿革から日米移民史等遂一調べあげて居られた様ぢや。ワシ共は惜しい人を早逝さしたのう。

米國に於ける日本人史編纂の聲は一時相當高調されたのう。此まゝに放つていたら全て歴史煙滅ぢやと、其處で在来縣人發展史が出來る。何々組合發展史と云ふ風に部分的の歴史は、かなり世に出たが總體的のものは到々出現するに至らなかつた。北加や華州の方ではどうであつたか、確知しないので觸れるを避けるが、南加では確か「史實保存會」とか云ふ機關が生れて三樹三梨氏を編纂主任として總体的な同胞歴史編輯を企て實行に着手して居たが、之又不幸三枝氏の病没するあり完成に到らず其後どうなつたか。今サンタフイに在る羅新の駒井氏やモンテベロの甲斐氏などが盡力して居られた樣ぢや。(何一つ記録もなければ參考書も持たず記憶をたどり〳〵ぢやで間違つて居たら誰でも教示を乞ふて置く。)

所が世の中の廻り合せと云ふものは不思議なものぢや。思ひがけない大事變が千九百四十一年に突發した。之は史家にとつては大した收穫であらう。德川末期日米交渉が初つてから此方戰後數年をしたら丁度百年を算へる樣になる。百年を一世紀と云ふ。今まで完成出來なかつた在米同胞に關する歴史を百年に亘つて纂み出す機會が到來したわけぢや。歴史がどんなに貴いものであるか言ふ迄もなからう。權威ある史家により百年史の編纂を望むや切なりぢや。さうして之だけは一世の手で成し遂げたいものぢやのう。

あはたゞしい立退騷動で貴い記念物やら記録を失くした人が多々あるであら

う。ワシなども荷物保管部の注意で、萬々一と思って羅府の預先からトランクを取寄せて見たら遣られたね。雨に濡れたと見えて全部ボロ〳〵に腐敗してしまって居た。灰見たいになってどうする事も出來ぬ。金で買へるものは亦諦めもつくが、渡米當時から集めた記録や記念物は再び手には入らぬ。二三日は泣くにも泣けずボツとしたのう。數年ならずして史材の必要は呼ばれるであらう。幸に保存して居る人達は大切にキープして欲しいのう。如何に記録が後世物を言ふか一例を擧げて見やう。

華美文弱に流れきった、元錄の武士に一服の清凉劑を與へた赤穂の義士は何名かと問ふたなら、三歳の童兒でさへも即座に四十七士と答へるであらう。嚴が「近世日本史」に於て蘇峰翁は四十六士と主張して居る。之は何によってゐるかと云ふと當時の記錄に因ってぢや。六と七が若しも爭ひとなった場合、最後の決定は其記錄がするであらう。

空は一點ポストンのよさは、　露のなさけの星月夜。（つゞく）

俳句

吉里竜耳

旭さす巖山明りや濃き桔梗。
人を見て逃げて行く手や女郎花。
うねりくねるコロラド河の秋燕。
澄み渡るモハベ野の空鷺渡る。
群鶉二途に岐れてひた走る。
木枯に羽を擴げたる鳶のさま。
草葺のびて細りし秋の徑。

鈴木緑松

君は去りゆく　あの影恐び
泣くよ今宵も　夜もすがら。

小山休風

暑い〳〵の　あの夏なりや
ほんにポストン　よいところ。

報告

去る九月三十日統政部會議室に於て本協會の總會を開き、編輯及び經營上の新陣容を決定致しました。茲に御報告申上ます。

中央理事

稲垣牧東氏（長）　野田夏泉氏　永瀬勇氏
鈴木胡仙氏　西本重明氏
外川明氏
岡本實氏　貴家おまき子女史
久留島技師子女史　芳川積三氏
亀重久子嬢（會計）

編輯部

松原信雄　有田一百
島原潮風　重富初枝
石丸九十九

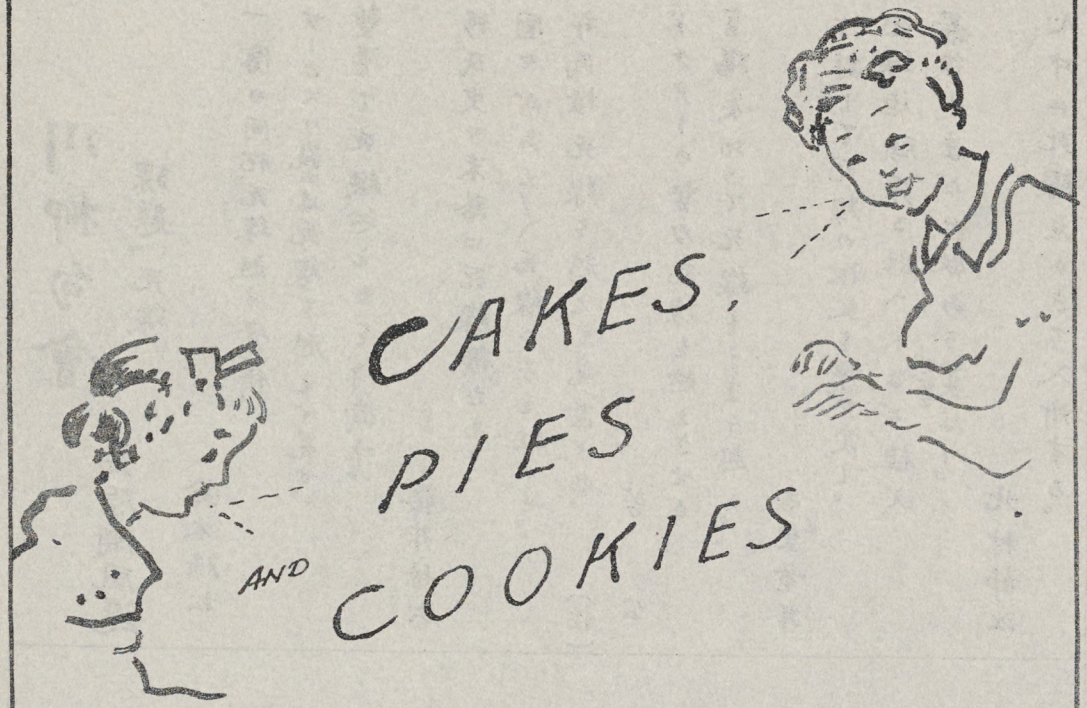
※　※

三大製品

大黒印 白味噌
大黒印 宝千麹
US 亀甲萬

宝千麹は自慢の品で御座います是非御愛用の程を……

デンバー市ラリマー街三五〇〇
羅府醤油醸造會社



BEST BAKERY

PHOENIX, ARIZ.

川柳句會

課題「死線」

島原潮風選

一億の同胞死線越す覺悟。　鈴木緑松

サーカスの藝は死線を越えて見せ。

塹濠で死線越えるを待機中。　藤井孫六

移民史の末路に死線横たわり。

國々があえ〳〵死線へ子を征かせ。

市民權死線を越えて見直され。　芳公　（佳）

ドクターの努力死線を越えさせる。

盲腸失切って死線をうまく越え。　吉里竜耳

注射して死線の祖父を呼び戻し。

死線迫頑張る肚へ木など植え。

最後迫まだ日數ある莨（たばこ）なり。　北村静江

心中に死線点がきて入所する。

彷徨って沙漠の中に居る二日。

前線の便りを待ち詫ぶ母の顔。　都地丘上　（佳）

運命と只諦めて死期を待つ。

黒煙を見とめ最後の聲を上げ。

一彈は致命生らし胸に來る。　安本時子

長期戰死線を越えた鉄兜。

生き甲斐を語は死線越えた今日。　聖水　（秀）

今日の地位昔を偲ぶ日記帖。

滿壘に死線を越えてホームラン。

死線上世に輝いた百部隊。　新屋軟葉　（佳）

危險期が過ぎて看護婦笑ひ聲。　（秀）

權利から死線を越えた負傷兵。

死線經て捕虜となってる卑怯もの。　河島次彦

簡單に醫師は死線の手を握り。

爭って死線へ迫る國と國。

日に三度死線へ達く箸をとり。　森岡春山

越えて見てあれが死線か退院日。（佳）

二ツコルの餞別死線越えて来な。

戰ひの死線を越えた松葉杖。（佳）　星野光葉

手術臺主治醫の眦によりきり。（佳）

カンフルの注射と最後のペンをとり。

死の線を越えた名譽の負傷兵。　津村汀村

死線越え勇猛果敢な二世兵。

忍従へ死線を越える旺を決め。

灼熱は死線に近い收容所。（佳）　谷本晩香

歩哨線までは無難に越す死線（佳）

何も彼も神に任せて死戰爭。　稲垣牧東

民族の譽れ死線の百部隊。（秀）

蓋世の英氣死線に練った旺。（佳）

實戰の數へ変った處世觀。（佳）　稲垣秋月

子の姿彈雨をくゞる夢にさめ。

百部隊死線の我子偲ぶ母。

拗ねた子も死線越えたと軍事便。（佳）　山西里江

幾度か死線を越えて今日の地位。

死を決し尚も頑張る底力。（佳）

歸還兵死線を越えた瞳の動き。　北村子守

幾度か死線越えたと軍事便。

今日明日の命と醫者に見放され。

漸くに死線を越えて日がのぞき。（佳）　濱口笛水

落下傘開くにきめて目をつぶり。（佳）

眞念は不治の病に勝って見せ。

命二ツ三ツ拾った金メタル。　關五松

宿命と黙して渡る太西洋。

割り切れぬ胸を押へて行く死線。

片足を死線へ残しやっと越し。（客）

吟詩漫筆(1)

大岡周洋

ポストン第一キャンプに遠井錦聲女史の錦聲流詩吟會あり、第三キャンプに埋橋氏指導の下に國風流詩吟會が近頃創立せられ、相呼應して朗吟の聲キャンプに響き渡る。勇ましく又喜ばしきことである。

詩吟流行につれて詩の研究も盛んになる。吟友の爲め吟詩に關係ある詩を先輩の書を參考として拔抄して見んと思ふ。而して江湖諸賢の教を請ふ。

世界大戰も何時終結するか何人も豫測すべからず。近頃二世も徴集せられ續々入營して海を越えて從軍する者多し。依って從軍行に關する有名なる詩を列記して見やう。

從軍行

從軍行は樂府相和歌詞の一にして軍旅苦辛の詞を敍ぶ。魏の王粲初めて之を作り爾後相效倣す。

建安體

世人よく詩を論じて建安に到ると云ふ。建安は後漢末の年號。魏の文帝の弟曹植、西園を鄴都に設け、文人才士を此處に集めて詩を賦せしむ。王粲、孔融、徐幹、陳琳、阮瑀、應瑒、劉楨、等建安七子が西國應教の作層見疊出す。曹植及七子等の作りたる詩を建安體と云ふ。

登樓能賦非王粲　沽酒忘形有鄭虔

王粲は登樓の賦を作りて有名なり。

此王粲の從軍行は初めは長詩であっ

たのだが、八句となり、唐代には絶句が多く作られて樂府として旗亭の麗人に管絃に合はして歌はるゝに至つた。

邊塞の調は悲壯を主とす。悲にも壯ならずんば軍中の樂をなさず。故に古來の作者力を此両者の調和に致さざるはなし。唐賢至つて多くその成功を見る王昌齢の如きは、其尤なるものなり。

從軍行　王昌齢

青海長雲暗雪山　孤城遥望玉門関
黄沙百戰穿金甲　不破樓蘭終不還

青海、雪山、長雲暗澹是胡敵が出没の所在、懸軍萬里孤城遥かに玉門関を後方に望む。身は遠く関外にありて風沙を冒して苦戰し著る所の金甲も亦穿破すると雖、前敵未だ殲せざる限り即ち敵の都樓蘭を破らざる限り生きて玉門関に入るを望むべからず。決死伏敵の意を表す。悲壯雄渾以て歌ふべく以て興すべし。

文學の一代の風雲を関渉する豈徒然ならんや。

從軍北征　李益

天山雪後海風寒　横笛偏吹行路難
磧裏征人三十萬　一時回首月中看

遣語雄偉、音調諧婉、月中引領の態度描寫して神に入る。

夜上受降城聞笛　李益

回樂峰前沙似雪　受降城外月如霜
不知何處吹蘆管　一夜征人盡望鄉

回樂峰前は平沙白くして雪の如く、受降城外は明月冴えて霜の如く、滿目蕭條として人をして凄然たらしむ。折しも何處とも知れず胡人が笛を吹きすさんで其聲最も悲しく、幾萬の征人是に感じて故鄉を望まざるはなしと。

風調劉亮として中唐七絶の第一となす。敎坊の樂人此を取つて聲樂として曲をなし、又繪いて圖画をなす。

從軍行（水調歌）雄壯の調、張子容

平沙落日大荒西　隴上明星高復低
孤山幾處看烽火　戰士連營候鼓鼙

塞下曲　盧綸

月黑雁飛高　單于遠遁逃
欲將輕騎逐　大雪滿弓刀

單于（匈奴の君の號）

樂府題にて邊寒の事を詠ず。月は暗く雁は高く飛び過ぐ。此時に乘じて夜討をなさんとすれば單于は遠く逃げ失せぬ。よつて身輕なる騎兵を引きつれて追擊せんとすれば弓も刀も大雪に埋れて如何ともせんすべもなき程寒くて苦しい。

其調極めて雄健にして而かも其意極めて悲壯。

從軍行　清　乾隆帝

三邊烽火照軍營　十萬丁男夜練兵
祖使腰間懸寶刀　丈夫何處不成名

九月十三夜　上杉謙信

霜滿軍營秋氣清　數行過雁月三更
越山併得能州景　遮莫家鄉憶遠征

金州城外　乃木希典

山川草木轉荒凉　十里風腥新戰場
征馬不前人不語　金州城外立斜陽

情歌

谷本晩香

世界動亂いつまで續く
神の畫寢のながいこと。
時局統制屈託なしに
子等の背丈の伸てゆく。
辛棒しやんせ韓信さへも
股をくぐつた事もある。

ユートピア

松原信雄

朝早くから裏の果樹園で小鳥が鳴いてゐる。爽かな朝の空氣が窓外から忍びやかに入つてきて、緑葉の生き〳〵とした香りをそつと置いてゆく。「いゝ氣持だなあ。」目が覺めたばかりの彼は獨り呟き乍ら傍を見ると、愛兒が無心に眠つてゐる。「何といふ可愛いやつだ。」さう云つて、そつと幼兒の頭をなでてやる。

「ピーチク、ピーチク、……」友を呼ぶのか、黎明を歌ふのか、小鳥は歌ひ續けてゐる。彼は床を離れるとすぐ裏の果樹園に出た。朝の光りは囀つてゐる小鳥の羽の上にも、靜かな微風に搖ぐ木の葉の上にも躍つてゐる。眞赤に熟れた柿は。もう葉がすつかり落ち盡した枝のあちらこちらに釣り下つてゐるのが繪のやうに美しい。柿の木と仲よく並んでオレンヂの木が「君らが居なくなつたら、僕らが代つて主人の食卓を飾るんだよ。」と柿にさゝやいてゐるかのやうにして立つてゐる。「この木々は風に搖ぶられ、雨に叩かれ、小鳥や虫に噛まれ、傷つけられても、『運命だ。』と黙つてあきらめて、不平を言はず、神を罵らず、來るものの凡てを素直に受け容れて、毎年々々甘美な果物を育て上げ、それを惜しむこと

なく人々に捧げてゐるのであらうか。」彼はそんな事を考へ乍ら、庭園の方へ廻ってゆくと、早くから起きた彼の父は大きく微笑みかけた菊の花にジツト眺め入ってゐる。庭園は父の努力で四季折々の花が植えられて、一年中絶えることなく花が咲いて、その美しい姿と馥郁たる香りが、和かな家庭の雰圍氣と融け合って、一入明るい空氣を醸し出してゐるのである。

やがて軽い朝食がしたゝめられると、蒼空の下で彼の農園勞働が始められるのである。さうして、次から次へと彼の勞働に報いて、新しい生命を産み出してくれる大地に對して、彼は親愛の情を深め、崇敬の念を強めてゆくのである。堀り返しても、堀り返しても、目に見えるものは土と砂の他には何もない。その中に單なる物質の小さい塊としか思へない、火の中に投げれば忽ち消えてしまふやうなその小粒を蒔きつけさへすれば、葉を吹き出してくる生命の不可思議、彼は其處に見えざる偉きな力を感じ、土を耕す手を休めては獨り冥想に耽ることが頻々である。

太陽が西の山の端に傾くと、彼は生命を孕み育てる愉しい一日の仕事を終へて我家へと歸ってくる。そして老いた両親や、幼ない子達を中心に賑やかな晩餐の食卓につき、それから一家團欒の樂しいひと時を過すのである。「貢(みつ)は誰の子?」「パパの子、ママの子、おぢいさんの子。おばあさんの子、」「それだけ?」定雄(父の弟)さんの子、兵隊(母の弟)さんの子、「それから、」「もうないー。」かうし

た無邪氣な會話と爆笑のひと時である。その後は友人と庭の更けるのを忘れて語らつたり、好きな書物に讀み耽つたり、又時々は家族揃つて芝居や映畫を觀に行くのである。

日曜日やハラ・デーが來ると、彼は必ず愛兒を伴ひ、寫眞機を携へて山野を歩き、海濱に遊ぶ。彼の最もよい友は自然と子供なのだ。花鳥風月に目を瞳つてゐる時の父と子は誰よりも仲のよい友達である。「ダディ、あの山の向ふに何があるの？」「さうだね。貢ちやんの一番好きなものが澤山あるのよ、何だらうかね」「アイス・クリーム。」「それから。」「チヨコレツト、それからあ、あのキヤンデー。」

幼な子と二人で居る時の彼は、財産、地位、名譽、憎惡、怨恨といつたやうな煩はしい大人の世界を全く忘れてしまつて、幼兒の心に還つてゐるのである。

これが極めて平凡な僕の又平凡極まるユートピアなのである（終）

ポストン風景（3）

松原信雄

夕食後、何處へといふ當もなく、キヤンプのあちらこちらを散歩するのが彼の日課の一つであつた。六月のある夕、彼はいつものやうに筋くれ立つたモスキツ

ド・ツリーのステッキを突いて足の向くまゝ、アド・ビルに近い世一部落の角迄足を運んで来た。不圖立止つて右側の教育課の建物の方に眼を轉じると、六十前後と覺しい小柄な老人がせつせとその前の雜草を切つてゐた。老人は彼の姿を認めると黙つて頭を下げた。老人の額からは汗が流れ落ちてゐた。夕食後、多くの人々はバラックの蔭に陣取つて、思ひ〳〵の作戰論に喧々諤々の論を闘はせたり、クーラーの傍でキャンプの噂話に閑暇を潰してゐるのに、この老人はどうして一人一生懸命に雜草取りをしてゐるのだらうか。不審に思つた彼はそのわけを尋ねて見た。さうすると、老人は流れ落ちる汗を拭ひ乍ら、ぽつり〳〵と語り出した。

「御承知のやうに此處はポストンの中央で、何處から人樣がお出でになつても、必ず目につく處でございますから、出来るだけ綺麗にしておきたいと思ひまして、私は夕食後一休みすると散歩のつもりで此處迄歩いて来て、少しづゝ掃除をさせて頂いてゐます。毎日少しづゝ綺麗になつてゆくのを見るのが何よりの樂しみです。私はこのやうに年を取つて、いつも皆樣の御世話になるばかりで、何一つこれと云つて出来ません。せめて私に出来るこんな事でもさして頂いて御恩返しをしたいと思います。」

彼はこれを聽いて目頭が熱くなるのであつた。やがて彼は大きな寶を拾つたやうな喜びを覺えながら、老人に別れを告げたのであつた。

ポストン文藝 詩壇

外川明選

詩 生活斷章

―豆腐甘き頃―

片井溪巖子

桃を食べつゝ
ももの匂ひの　白いナプキン。
けふは豆腐をさげて
長い影が坂路を急ぐ。

×

をんなもこぐ
櫂のしづくの……
まばゆい　秋陽。
日曜の波音うれしく
ふたりは岸へかけつゝ
ゆるゝ青葉の湖畔。

みづとり啼き　昏るるを
噴水の方へつれだつ
妻の脊せたる
しみ〳〵とよこがほ。
秋菜へとまる
つがひのてふ〳〵の
まびく手をやすめると
また飛んでゆくかげ。
移り来てこゝに咲かせる
朝顔へちま夕顔と次々。

（コロラドにて　重陽　二四）

朝のひと時

はげむ

カン〳〵、メスの鐘が鳴った。
午前七時。
十四、十六、十八歳の、
娘の先頭が私、
妻は殿軍。

× ×

大通りの側を流るゝ小溝。
八手の葉と、ちぎれ雲の影が浮いてゐた。
堤 傳ひに行く私達五人の、
影もさかさまに これに加はった。

× ×

水底に宿泊った。
白い舟型の残月が、
私達と競争して行く。

一歩進めば 月も一歩、
三尺行けば 月も三尺、
限りない競争。

× ×

十六娘が、
「オヤー」と言ふ。
何所から来たのか、三匹の目高が、
尾をふり〳〵、
一列になって、
競争に加はった。

× ×

妻が、
「オヤー」と言ふ。
「何う したのー、」
「ホラー お月さんの舟に目高が乗って……」。
十の目玉は 一齋に月の舟を視る。
五人の姿の影は、
現實の人より 綺麗だった。（一九四四、八、八）

古日記

土田箕人

樟腦の香り　たえ絶えに
箱より出し　古日記

筆蹟辿り　ゆくならば
胸に血潮は　高鳴れど

誰へ語らむ　今更に
人生五十に　轉變と

浮世の浪に　棹さして
言葉に盡きぬ　感想は

愁奮交々　禿筆の
墨蹟まどろに　浮び出す。

淋しき秋

蒼逸

月は今しも　巖山の
空に黙して　寂寞の
下界の聲に　聽き入りぬ

我は水邊に　底の影
眺めつひとり　物思ふ
心の響き　傳はるや

淵に紅葉の　落ちゆけば
水面の月は　碎けたり
微細に震ふ　漣に

旅路の秋に　人生の
闇を愁しむ　我が心
嗚咽となりて　風に散る。

旅の歌

ユタ州ブリガム旅舍にて

阿世賀紫海

(一)

旅は寂しい夏草に
吹きくる風はソルトン湖
照るも曇るも風まかせ
月は隱れておぼろよの
夜更けの空に光る星
軒端にすだく虫しぐれ
あすの夢見る假の宿。

(二)

タヅく頃の寂しさや
空には渡る雁のむれ
鴨の羽音もさはやかに
赤き夕陽の沈むころ
旅舍の窓より灯はもれて
親にはなれた娘たち
すゝり泣くような聲がする。

(三)

夏草茂る軒端より
蚊軍攻めるいとをしさ
よもすがらなる蟲の聲
暗夜に星の薄明り
ブリガム遠く三マイル
長蛇の瀛車の過ぐる頃、
町も寢たような灯が見へる。

(四)

淺き夢路の醒め易く
起きれば朝の宇氣涼し
水の流れも滾々と
鉄路に咲くや日向草
蒲生の繁み青々と
なびく潮風身に沁みて
旅にゐる身の唄も出る。

流れ星

木内春波

樹から樹へ
ハンモックを吊して
食後の夕涼みをすれば
打ち水は沙漠の風に
またたきのまに乾き
ポプラの葉ずれも
かさ〳〵と潤ひもなく
しきりに啼く葉蔭の蟬に
汗は　しとゞ肌を流れる。

× ×

懐かしき太平洋の潮音
常春の加州・住み馴れし聖林よ

夜の街の青い灯赤い灯よ
新しく胸に甦る數々の思出……
されどあゝ……平和の神よ！。

× ×

果しなく擴がりゆく戰雲に
全身を蔽はれし地球の惱み
沙漠の中の收容所の隅まで
朝夕に届く血醒き風の便り
あゝ白鳩よ　平和の便りは何時か
開じて祈りし瞳を開けば
おほどかなる沙漠の空に
青白き尾を曳いて消える　流れ星。

ポストン文藝　歌壇

永瀬雨選

長月歌會詠草集

（順序不同）

児玉なを

池の金魚浮びたるらし小さきが藻にむらがりてあやに光るも。

千軒の屋根おし照らす十五夜の月天の真中に光冴えにつつ。

盆踊り收容所にして見ればうらやすく飽かぬ眺めにいたく宵更け初。

天の河傾く見れば今はわれは音頭の群れにわかれ告げなむ。

クリスタル市　川原八重子

しののめの光を指して一と群の小雀飛び出羽音清しく。

十六夜の月明き野に濱千鳥しき鳴くきけば寂しかりけり。

小夜更けて窓越しに見る四日月墨繪の如く靜かなるかも。

村雨の降りにし日より際立ちて朝宵の風涼しくなりぬ。

外谷千代

堀川ゆもれし水溜りの叢に夜は蛙のこゑかまびすし。

軒の灯にしたひよりくる蟋蟀を素早くとらへ猫は食ひ居り。

味氣なく暮れし一日は千年も生きし思ひして倦み果てゝ居り。

加州歸還の日はいつならむと思ふ時吾れの心の落ちつかなくに。

貴家　志ま子

吾を逐ひし羅府にはあれど赦しあらばふたゝびゆきて住まゝくし思ふ。

戰爭などありとは思へじ朗らかにレデオにあふれ爆笑起る。

書きなむと思ひし事の興さめて忘られゆくは惜しき心地す。

雜草の細き葉先きに蜻蛉憩ふその身輕さになりても見ばや。

清時　文子

道の邊の雜草中に咲き出でし朝顏の紅ま日にかゞよふ。

砂塵にも今は馴れつゝ吹く風を道にやり過ごし朗らかにゆく。

とりどりに活花くゝる友らの面ざしのひきしまり見ゆ水盤を前に。

猿渡　則子

雲燃えて陽は野に落ちぬ今日の日もつつがなかりしを有難く思ふ。

子供等の歸りし後の教室に心足らひて吾れは祈りす。

書く文字のふともにじみし紙の上の涙の跡に見入り吾が居り。

永瀨　正臣

雨あとの空の清しさ吹く風の音にもすでに秋を知るかも。

貧しきに堪ゆるこゝろを妻に子にもたせんとしていへば寂しも。

離れ住むことさへさびし戰時今友ひとり又逝かしめにけり。

野のはての巖山の上にいつゝむつ秋の雲うきかゞよへる見ゆ。

大園晴子

亜町より弟等野球試合に来る。

野球ファンゆ賜びし花籠の大き持ちて弟ははろばろと遠征に来ぬ。

大いなる花籠につける名札には知れる名もありてよみつつなつかし。

遠征に来し弟の野球試合見たくあらましを病みこやる夫は。

シャツトアウト喰はすべかるをと吾子が得し安打を言ひて口惜がるも弟は。

赤松傳代

初秋の風涼しく窓ゆ吹き入るに遠き故郷のわぎ家思ほゆ。

吾が蒔きし唐胡麻は大き木となりつゝ夏の庭によき影落す。

ポストンの禿巖山を見さくれば遠く偲ばゆ故郷の山。

川口静洋

大き世の誕生れむとする胎動をゆゝしくも近く身に感じ居り。

バスを待つ小舎の前庭のま日向にちいさく赤きペチニヤの花。

ポストンの名におふ秋の月見つつ歌なき吾れを心にぞ恥ぢ。

あさなさなおく露ありて沙原にも千草茂りつつ秋深み行く。

鈴木緑松

二日前共に語りし吾が友のみ魂にはかに今宵消にけり。
君が魂今宵此の世を去りゆくと吾れは蒭にも思はざりけり。
佛前の君がうつし忌にほろほろと通夜の法燈の光ゆれやまず。
亡き友の柩むかへて人々とみ佛の前に通夜のいとなみす。

ネブラスカ　赤星さと

大空に煙もて字を書きゆきし飛行機はついに雲にかくりぬ。
グリンハウスのむし暑き中に男の子等は笛を植ゑ居り汗垂りにつつ。
戰地より届きし文の半分まで切り取られあるはものの足らぬなり。
幾山川へだて住めれど文藝誌の上に友の文はりはとはに保つべし。

矢形溪山

湖深めてまっ赤に今し立ち昇る日輪は大き日の丸の如し。
落葉せし濱邊の木々の枝間より黑煙を引きて往く流線の見ゆ。
黄に紅に庭の諸樹はもみいでつ漸く秋も深からむとす。

柳本錦子

肌にしむすゞ風うれしやうやうに九月となりて夏ゆかむとす。
祖國の威力ニュースの上に危ぶめるひとの信念をあはれみて聞く。
國ひらけて茲に幾千年曾て無きこの大戰の止む日知らえず。
未曾有の大事の中に社會をへだて歌よみつゞけてのびし生命か。

はるばると來たり給ひしつはものをもてなす術のなきぞさびしき。　北林静江

旅にして召集令を受けし子は一人さびしく出で征きつらむ。

ふとあげし吾が目の上の大空に静かに舞へりさぎの一と群。

わくらばがぱさりと一と葉地に落ちて秋はしづかにしのびよるらん。　永瀬勇

生花

五種活けの稗の穂立ちの白きんでて高さが瞳に清けかりけり。

五種活けの稗もアカザも穂にたけつしかすがに秋は近づくらしも。

稗は天にペトニヤは地に五種活けの種々が保つ位置のよろしさ。

妹が手に活け上げられし稗の穂のすがしさに思ふ初秋の野を。

後記

幾ら暑いポストンでも拾月にもなると矢張り秋で、昨今の朝宵はやや肌寒さを覺ゆる程の涼しさになった。もう古めたものである。クーラーも要らなくなった。其處で九月の歌會は去る三十日午後二時より、従前通り元の北七・七・月で催ふした。今回は集るもの十四名、近來にない盛會であった。尚ほ新に赤松傳代氏の來投を見た事は吾々歌友一同の大いに歡迎するとこ

ろであつた。此れで吾々歌會も最近三名の新人を得た譯で、一時は轉住やら其の他の都合で歌友も拾指を折るに足らぬ程に減つた事もあつたが、再び斯うして皆々と會の隆盛になつて行くのを見る事は誠に喜ばしく、又力強く感じる者である。吾々のやつてる事も萬更ら無益ではないらしく、つねに何處かで誰かゞ注意して見てゐて呉れるのである。だから油斷をしてはいけない。倦まず撓まず續けてこそ、始めて自分の望む域に達せられるのであるからよく其處を辨へて一層の努力と精進を祈る。（勇記）

近代の歌　數首

枯れがれの高草なかに頬白を追ひたつる子らか頭だけ見えて。　半田良平氏

昨日は見ず今日か萌えでしつまぐれの二つの芽生こもごもに見る。　仝

岩つばめ巣立ちし雛がゆきかよふ谿の日ざしのやはらかき色。　松村英一氏

なびき合ふ茅萱の光しづまりて谿の隈みの影ふかまりぬ。　仝

雜草は妻が拔き捨て競ふがに我と子として土鍬きおこす。　植松壽樹氏

苹植ゑつつ我が見向かねば幾人も立ちとまりてはまた歩き去る。　仝

吹きくるに間ある中洲の草生風をりをり照るを思ひたのしむ。　谷鼎氏

向きあひて投げいだしたる靴底に草のぶまれし色あをく滲む。　仝

からうじてわが子三人をはぐくむとこの滿洲のどこが住み良けむ。　山木友一氏

この國の四月一日に飛ぶ雁はたかだかとゆき天にかくらふ。　仝

選後隨録

◎千軒の屋根おし照らす十五夜の月天の眞中に光さえにつつ。

右の一首素材から言へば別に目新らしいものではないが、對象に向つてひたぶるの心を傾注して詠まれてる作者の態度がよいと思ふ。歌意は今更ら説明の必要ない程明瞭であり、歌はただけ言へばよいのであまり多くを言ふ必要はない。今回の詠草集中にも一首の上にあまり多くの事を言はうとして感の統一がつかず失敗したと思ふ作が少くなかった。其ろ云ふ人々はよく注意して此作のもつ感の單純化と言ふ事を學ぶべきだと思ふ。初句の「千軒の屋根」は誇張ではあるが此の場合厭味ともならず却つて効果的だと思ふ。又四五句も良く無言のうちに夜も相當更け四邊がひつそりとして靜寂感をさへ抱かしめ得る描寫的表現で好感のもてる作だと思ふ。

◎天の河傾く見れば今はわれは音頭の群れに別れ告げなむ。

前作と同一作者のものである。此作では初二句の具象化表現を見るべきであらう。「天の河傾く見れば」で夜も既に大変更けたと言ふ事が言はれてあり、そして三四五句と自分の心の中に湧き起つた感情を

述べられてゐるのである。勿論此裏には充分に作者が自分の身をいたわると云ふ心持ちが伺はれると思ふ。

◉堀川ゆもれし水溜りの叢に夜は蛙の聲かまびすし。

此作では上三句の觀察のこまかい点を採り度いと思ふ。四五句はやゝ説明が克ち過ぎてるのではなからうか。然を言へばこの邊にも少しピンと讀者の胸を打つ様なものがあつたらと思ふ。

◉砂原も秋にしあればなよなよと咲ける花にも秋の風情あり。

此歌出來てる様で其實三句以下の情景がはつきりせぬ憾みがある。「咲ける花にも秋の風情あり」は作者自身にはよく解つてる情景なのだが讀者側から見れば抽象的で物足らない。此處はどうしても印象的表現を必要とする處で、それが出來て始めて讀者も作者の見た情景を思ひ浮べる事が出來、作の上にも同感が持てるのではないかと思ふ。

◉雲燃えて陽は野に落ちぬ今日の日もつゝがなかりしを有難く思ふ。

良く整つて作と思ふが、唯下句の「有難く思ふ」は少々言ひ過ぎた感である。勿論作者の「滿足した心」を述べられてゐるのであるが、斯様に言つて仕舞つては作の後に殘すべき餘韻と云ふものが無くなつて、歌が淺くなつ

て仕舞ふ。だから此心持ちの解る様に他の言葉をもつて下句を表現されたら力ある作となるのではなからうか。

◎靈柩に法燈ゆれて手向花嘆きかなしみ友を送れり。

これが前言つた一首にあまり多くの事を言はふとして失敗した作だと思ふ。亡友の告別式に取材されたものであるが、作の上にはちつとも其のかなしみが感じられない。言葉としては「嘆き悲しみ」と言はれてゐても其れは當然な事を言つたに過ぎないので却つて厭味にひゞく怖れがある。斯様な感傷的な言葉は出來るだけ作の裏に潜める事。告別式と言ふ様な特殊な場合作者の心眼さえ開けてゐたら「法燈のゆらぐ」と云ふ事柄だけでも立派に一首出來るところであろと思ふが遺憾ながら作者の心の緊張が足りなかつた。注意すべき事である。

◎未曾有の大事の中に社會をへだて歌よみつぎてのびし生命か。

誠に手馴れた詠み振りで作歌経験に浅くない事が解る。強いて難を言へば「大事の中に社會をへだて」で「此世界大戦の時敵國人として收容されてる身」と言ふ事が一般に通じるか何うかと言ふ事である。さういふ點から見て此作には詞書でも附けたらと思ふ。下句の餘韻ある表現擘ぶべし。(以上)

ポストン文藝　柳壇

島原潮風選

第四十八回川柳句會

課題「運」　島原潮風選

天

成り行きを任せてからの住心地。　山本竹涼

地

運のよさ歸米であって4のC。　竹本芳公

子の武運千人針で信じ切り。　吉里竜耳

人

運の好い同志にされて割る西瓜。　斉藤一流

再建へ運を開ふ荷をまとめ。　稲垣秋月

四十年過去の夢追ふ日向ぼこ。　山本竹涼

五客

全滅の中を飯ったた幸運兒。　靜女

牡丹刷毛瞼の母が眼に浮び。　竹涼

運命の飯にも飽きてもう二年。　丘山

運命は血を血で洗ふ太平洋。　孫六

運不運出雲の神にたよりきり。　子守

十秀

運命と云ふも哀れな二世兵。　汀村

ニューミシシン軍需景氣の風を切り。　仝

ふるふ手を靜かに運ぶ見合ひの茶。　光葉

良妻を迎へ更生第一歩。　一流

負け嫌ひまだ運命に逆らふ氣。　春山

運命に任すつもりで子は兵士。　軟葉

運命の過去を微笑む幸に居り。　秋月

運天も倦まぬ努力が今の椅子。　牧東

子の武運祈る淋しい母の日々。　時子

征った子に武運を祈る母の日々。　狂月

佳

其先は只運命の波任せ。　巴水
一足の違ひ幸運恵まれる。　一流
トランプを出して占ふ妻の留守。　鏡水
運天にイースト行きと柵を越え。　静女
運命へ諦めて居る收容所。　穂村
運命を天に任せて木を削り。　芳公
宿命へ数球をつまぐる齢になり。　休風
子の武運祈る千人針の出来。　静江
運動會決勝点へ撞る汗。　時子
運命は天に任せて荷をまとめ。　仝
國運を具に語る地図の色。　緑松
運命を説いてる中に俺も居り。　笛水
結局は運に任せて轉任か。　踏舟
エバキユーへ不運にしては大き過ぎ。　仝
運命は同じ血と血を敵味方。　春山
運は天虎穴に入って見る覺悟。　巴水
運あれば太平洋も跨がれる。　次彦

（八十二句中採句三十八句）

互選句

課題「裸」

入点

5憧れた國で裸の四十年。　谷本晩香

3宿命と今の裸へ目をつむり。　稲垣牧東

3停電へきひろい聲をシャワの中。　稲垣秋月

2歳六十路裸にされて神にふれ。　野田鏡水

3何もかも裸になって出直す氣。　北林静江

2追ひつけばつるりと逃る裸の子。　津村汀村

2丸裸二度の希望のバスは揺れ。　星野光葉

2半世紀元の裸に振り返り。

藤井孫六

一駈け出して抱きあげられたまっ裸。

一四十から最一度起とり着たっきり。　北林静江

一此頃は辱かしくないシャワの中。　都地丘上

一着替さす着物裸を追ひ廻し。　安本時子

一夏の夜半裸のモデルにある魅力。

一水泳場銀波に踊る肉体美。　聖　水

一愚痴も出る裸になった今日の我。

一訪客に裸書寝の周章かた。　新屋軟葉

一裸から築き上げたる今日の地位。

一徴兵へ裸が續くクリニック。　河島次孝

一淋さへ裸の貼布振って見る。

稲垣秋月

一環境へ裸にされて價値が知れ。　山西里江

一更生へ眞裸で乗り出す氣。

一水泳着乙女羞恥も忘れられ。　北村子守

一まっ裸子は喜んで逃げ廻り。

一肉体美種々様々のシャワの中。

一親の恩裸になってからしみる。　濱口笛水

一責任へ裸になって男なり。

一盥風呂タオルが裸追ひかける。　関　五松

一かっちりと四ツに組んだ力瘤。　芳　公

一半裸体見せて泳ぎに來る娘。　吉里竜耳

一裸でも死ない道が開きかけ。

1 冊の持つ着物へ裸逃げ廻り。　森岡春山

1 敵の隙狙ふ力士の目の動き。　鈴木緑松

以上

十月十五日部落十九に於て

互選句

課題「玉」

入点

5 玉の緒の續く限りの決死隊。　鈴木緑松

5 寶玉に勝る老女の瞳が清い。　安本時子

3 球投げが上手になった子の育ち。　津村汀村

3 玉の下潜る場数に出來た腹。　稲垣牧東

山西里江

3 玉遊び更けて氣のつく空賊布。　谷本晩香

3 最後には癇癪の玉をぐっと呑み。　鈴木胡仙

2 玉碎の子へ萬歳と又涙。　鈴木緑松

2 玉の興古巣の友へ顔をむけ。　鈴木緑松

2 寶玉も捨てゝ戰ふ日本魂。　津村汀村

2 建設へ奉仕を續く玉の汗。　安本時子

2 幼年期未だだまさるゝ五仙玉　芳公

1 打った玉見えず飛行機目にとまり。

1 玉追ふて半日過すゴルフ狂。　潮風

1 マーブルに夢中になってはい廻り。

1 ポストンの暑さも見える玉の汗。

初歩添削講座

島原潮風

△原句 ○添削 批評ナシ

課題「勝」

井上二葉

△勝ちつゝも涙なりけり敵りし友。

○勝ちつゝも涙で散りし友思ふ。

△勝つ續く相手憤り駒を投ぐ。

○勝ち續けられて駒投ぐへボ將棋。

△子供ぢれ負けて勝ちつゝ導く家路。

○ぢれる子に勝たして導く我家路。

鈴木緑松

△勝ちつもる雪の消え行く竹藪。

○勝ち積る雪も朝日で解けた竹。

△勝ち續く將棋の駒の勇ましく。

○勝ち續け並べる駒の勇ましく。

△勝ち續く王を攻めたる將棋駒。

○勝ち續く王を攻めたが駒不足。

△勝ち續く四目五目に負ける盤。

△勝關を上げる其日の遠遠し。

○勝關を上げる其日の待ち遠し。

△ほのぼのと勝關兆空の色。

○勝關の兆しほのぼの見え始め。

藤井孫六

△勝ち負けつ火花散り散り。

○シーツンがすんで之からフートボール。

谷本晩香

△腕力に勝って多くの敵つくり。

○腕力に勝って數多の敵も出來。

△子に勝て妻親父女房へ頑固なり。

○子に勝て妻親父女房へ頑固なり。

△碁勝負へ妻は二度目のお茶を入れ。

津村汀村

△勝ち誇る玩具鉄砲の筒を向け。
○勝ち誇る子はおもちゃ銃筒むける。
△勝負へ野球ファンの高聲揚げる。
○勝負へ野球ファンの高い聲。

森岡春山

△父さんの機嫌で解る勝相撲。
△勝ったのをあやまりに行く子の喧嘩。
○脆白は勝てば勝ったであやまらせ。
△勝ち負けをつけず治める母の智慧。

渡邊昭女

△兎も角も宣傳文は勝つ時句。
△眞剣になってぐん〳〵群を抜き。

此調子々々々

雜詠 秋句

濱口笛水

頼まれた人も出て行く秋三度。
朝露によろ〳〵として秋の蝶。

朝霧に雫を深めて葉鶏頭。

ヒルクレスト　野田鏡水

逢ふ場所もきまり時計も進めとき。
茶の味を褒めて語がまた續き。
揚仕事煙草が甘い午後三時。
これからの生活靜かに考へる。
再移動今度は夫も居る安楽。
秋の夜をしみ〴〵妻と子を語り。
暑いのと多忙とで川柳の選が遅れました。十二月號には見榮、安全、有耶無耶、賜物、頑固、音、兩上り、を夫々大家の選で發表して本年の總點定を致します積りですから御赦しを願ひます。尚本誌三十六、三十七頁にも掲載致しました。乞御覧を。　潮風

次回川柳課題

『新年雜詠』　一句吐

創作

一環

久留島芙紗子

一年有余にもなると、同じ區内の人達の聲を無意識に聞きわけてゐるのであつた。よく遊い人達が、友達の噂をしてゐるのを聞いてゐると、「……さん……ブラック5ガール、とかブラックセボーイ」と言ふやうなことを言つてゐる。ブラック。ナンバーは何時か名稱の樣に附隨して、その人々の個有名詞となつてしまつてゐるのである。何時かかうして、ナンバーの符號が自分の爲に憑いて廻ると、他のブラックの友人を訪問することをも億劫にさせてしまふのであつた。偶々友人の家を訪れて、遂おしやべりが時を過さしてしまつた時、「御飯召し上つてお歸り」とでも言はれると。食堂で大衆の視線が此異分子に、たとへ意味の無いことは分つてゐても、肌へに針のやうにつき刺してくる、感覺の侘びしさを思つて慌てゝ歸つてくることがある。

此頃であつた。私のブラックの中に聞き覺えのない聲を耳にするやうになつてゐた。間もなく新らしく、ムーブしてきてゐる人のあることを知つた。其男は一人で居た。四十七八か、もつと多いかも知れない。自分よりはずつと懸隔の多い人間の年と云かものは見當がつかないものであるから或はずつと違つてゐるかも知れない。

けれど、私は其男を見た時に「オヤ」と思つた。何か知ら変な氣持がした。それが何であるか私には分らなかつた。どんなに記憶を辿つていつても、ずつと〳〵知い日迄私の記憶をたぐつてみても、其一筋の糸の上に棄つてくる何

物もなかつた。すると又私は自分の過去を棄せた想ひ出の糸を、そつと糸巻に巻いて心の隅に藏ひこんで置くのであつた。

さうして、二度、三度と逢つて居る裡に私は意外なことを其男の中に見出してゐた。私の顔を見るとそつと顔をそむける様にして通りすぎてゆく男、どうかすると出會ふ事を避ける爲に道をそれてゆくやうなこともあつた。そのうちに、何時か私は不可解な最初の印象のことも忘れてきて「ふん、ヘンチクリン奴」と心の中で吐き捨てる様に言つて、冷たい一瞥をも向けることはなくなつて居た。

キヤンプの中も個々に生活の波がさざめいて、除々に轉住していつて残つた者のみがあきらめに似た生活の落ち着きを見せて居る。

冬から一足飛びに夏が来て、秩序もなく突つこまれた柳やカツトンツリーが急に芽を吹いて来た。立枯病にかゝりやすくて少くなつてしまつた楡の木も、小さい濃い緑の葉をつけて、目からはいつて既に、精神的に此夏の涼しさを約束してゐてくれるやうであつた。

けれど誰も彼も「暑い、暑い」と言つて、今年位暑い年はないといふ様な顔をしてかこつてゐるのであつた。

此春から夏にかけてはしきりに外部轉住に心を動かされてゐた。

外部の友達から「やはり外は良いわ」と言つてくると、もう私は手紙を讀み乍ら外に出ることを決心してゐた。又他の友達から家がなくて困つてゐたり、子猫の頸程のレターヌが二十仙もしたりする様な手紙を貰ふと、もうしよぼ〳〵とひどく寒い氣持になつて、單調な一日に忠順にならざるを得ない様な

考への中に自分を追ひこんでいったりした。それからは又、十六時の給料とみんなの被服費を頭の中に配列しては分配し、同じことを毎月繰り返しそれと一緒に同じ愚痴もくりかへしてゆくのであった。

其間、時折りニュースなんか見ると、戰禍の巻を放惶して廻る。ヨーロッパの南洋の住民を想ひ、兵士を想って、自分のちっぽけな贅澤な悔みを暫くは噛み殺してゐることもあった。けれど常にはやはり身近な現實の中で様々に呻吟してゐた。

時には戰爭を忘れた様に、ポールゴーガンの『ノア・ノア』の感能に惑溺してみたり、ふっと思ひ直して系統立てゝ讀書しやうと考へて、輕い經濟書や日本歴史を繙いてゐるかと思ふと、それも二三日で放り出してしまって、今度は東洋思想に興味を向けて、年代による著作まで書きぬいて、それを儒學・神道・國學と系譜を分けて、一つ一つ其梗概を拾ひ讀んでゐることもあるが、さうして構成された理論的な物はすぐに自分の弱い頭を疲れさしてしまふのである。そんなものよりは「伊勢物語」や「源氏物語」「枕の草紙」「土佐日記」など、又ずっと近くでは「近松」や「芭蕉」「西鶴」の物の中からの方が、私にとってはずっと其時代の思想にぢかに觸れてゆけるやうであった。

かうして「ぐっと」自分を理性で引張ってみるものゝ、常に私の氣分は砂の様にちらかり易くて、殆んど掴むことの困難な状態にあった。暫くさうした惱みの中を泳いでからは、又せっせと靴下の穴をかゞったり、布地を展げてドレスのデザインに腐心してゐることもあった。

緑の葉がどぎつい程濃くなって、ぎら〳〵とした太陽が、色の無い土の上に踊ってゐる頃、私の心の圏外を遠く離れてしまってゐた其男が、突然吐血して入院した。身内のない其男の為に友人達は輸血をしてやったり、經済的にもいろ〳〵骨折ってゐるらしかった。

絶望視されてゐる彼の為に、何か日本の肉親達に残して置く言葉を聞いて上げなければならないのではないかと思ふこともあった。

其男は間もなく死んだ。けれど私は其男のことをほとんど念頭において居なかった。

丁度其頃、ヨーロッパにわたる前の暫くの休暇を得て弟が歸って來てゐた。

若しかしたら會へなくならないとも限らない。私はそんな想念を拂ひのけつゝ一刻でも弟と語り、弟の傍に居たかった。

お葬式にもと〳〵行かなかった。

お晝前であった。大きなキャスターの木蔭で、池のメダカの憂苦もなさそうな怨々とした泳ぎを見るともなくぼっねんとしてゐると、

「まあ、敏ちゃん、どうねー、午前中のバスに間にあはんので一すよったんよ。」

と言って、此屢にはいってから一度訪ねて下さったことのある叔母の友人だといふ其人は、人の好さそうな澄んだ目をして、大きな前歯を二ツも出して笑った。

「あゝ、さう、それではお晝御飯召し上って悠然りしていらっしゃいませ。」

初め訪ねて下さった時、十幾年振りだと言はれた。なか〳〵記憶に判然りと浮び上ってこなかったその夫人に精一杯の言葉を使って私は立ち上った。

「あんた葬式に行ってゐなかったんね。」

「えゝ、弟が來てゐますので。」
「えッ、幸雄さんが？。」
「今度、オバシーしますので。」
「へえ、日本では心配してゐることだらうね。」
「仕方ありませんわ。本人も後半を日本で育ってゐるので、思想的には相當惱んでゐるやうです。」
「友田さんも可哀想なことだったのー。」
「ほんとにお氣の毒でしたわ。」
「此ブラックに居られたとは思はなかったよ。」
「えゝでも私物を言ったことないんですのよ。何だか『所の奴等とはつきあひたくない。』っておっしゃるんださうです。」
私はわけの分らない憤懣の吐け口を漸く見出したやうに言ってその夫人の顏を見てゐた。夫人は暫く私の顏を見てゐた。

「あんたは知らんのだらうけれど、」と言ってスーッと深い息をした。
二人の間に一寸重い沈黙が續いた。私はだんだん不安になってきた。それでも私はまだ黙ってゐた。おばさんは自分の姿勢を少し替へて思ひきめた樣に、低い聲で次の樣な事を語り始めた。
「友田さんは文江（私の叔母）さんと結婚をしてゐた。あんたはまだ十位だったからね、尤もそれは戸籍の上だけのことであった。」
友田の兩親と文江の兩親は兄弟同志のやうに親密な交りをしてゐた。
親と親との約束で友田と文江は結婚をした。不在結婚、何故ならば、友田は其當時青年の心に大きな夢を投げかけた、黄金の果物のなる國のアメリカに行ってゐたから。併し年年たっても一年たっても歸るべき友田は歸って來なかった。その代り文江の従兄妹の精

二郎が見違へる程洗練された表情と、仕立おろしの洋服と金ぐさりを胸に張ってかへって來た。

中耳炎の手術の結果がおもはしくなくて、二度目の手術をして病院の白いねどこに横はってゐる文江の枕元を精二郎は毎日訪れていった。

文江は待ってはならない人を毎日愉しく待ってゐた。

甘ずっぱい喜びを伴った、深い不安と苦惱は決して文江の病狀を軽くしてはくれなかった。病狀の渉々しくないまゝに、親達が疑惑の目を向ける頃にはお互ひの愛情は深く〳〵堀り下げられていってゐた。

叔母は精二郎と結婚してアメリカに來てゐる。今ではもう大學にまでいってゐる子供がある。

友田は何も知らないで彼等が結婚する直前に歸ってきた。

丸い小さな山、其麓に眠ってゐる靜かな村。村を半圍して流れる三吉川の清流、どんなに物質に惠まれたアメリカに來てゐても、故郷の山と川と空は何時も美しい詩となって想ひ浮んできた。其友田の美しい詩畫の中にもう一つ生きた詩があった。それは夢みる樣な瞳をもった背高い文江の姿であった。

友田は故郷に三日居ってアメリカにいってしまった。彼はとう〳〵私の父のキャンプには歸って行かなかった。

大人の社會にそれを送ってどんな問題が起っていったか私は知らない。

叔母の病氣が癒ってから、祖母は何時も私を文江叔母さんに憑けて出した。私とは八ツしか年の違はない。毎朝私の髪を結ってくれてゐた優しい叔母はなぜか何時も不愉快さうな顔をして私を連れて出た。

ぷんとして大股に歩いてゆく叔母の

後を私は泣きたい様な氣持で暗い夜道を小走りについていったことがある。

義理と、體面と、憤怒にあえいでゐる。祖父母の苦惱の流れてゐる家の空氣が感受性の強い私にだん〳〵と陰氣な翳を落していった。父母の顏も記憶にない私は、其頃親の間で話のすゝめられてゐた九州の涯の親戚の資産家の養女となることを簡單に、「うん」と言って行ってしまった。子供のない其家の家督を巡って親戚同志の爭ひは、何時か私に人々に對する憎惡と、猜疑のみを植付けてくれた。そこから私の放浪は初まった。

併し背高く、色白く、明眸の叔母は私にとっては一番可愛がってくれた、優しい人であった。

友田は叔母を愛してゐたといふ。私は彼が何を思って生きていったか知らない。何故ならば私は戀は男にとって全部だとは思はない。男にとっては戀はどんなにでも取捨出來る。人生生活の一小部分に過ぎないことを知ってゐる。いやしくも健康な精神をもった男性であるならば……。

其夜、私は一つ一つとバラックの灯の消えてゆくキャンプの空地に立って夕暗の中にぼんやりと浮いてゐるはるか向ふの岩山をみながら友田の冥福を祈った。友田の心を考へ、友田から殆ど存在を無視されてゐる日本の彼の妻を思ひ、それらを廻るいろ〳〵な過去の人々を想ってゐる私の心から次第々々にそれらがぬぐはれていって、消えてしまったあとの私の心は、久遠な夜空の奥に吸はれてゆくやうであった。

（一九四四、九、二九、）

○絶えずよりよき人になって行く、其處に人生の本當の仕事は全部含まれてゐる。

ドラマ 白衣の天使

鈴木政一

註釋

一日として休みのない、夜となく晝となく一分間でも閑める事のない病院。その病院の一日の日課をドラマに作り、醫師二三名、看護婦七八名、其他の助手に依って之を上演して觀せて頂いたのが去る八月廿四日の夜でした。

マイクを通じて響き渡るドクター鈴木の耳に親しいヴアリトンと、洗練された言葉による説明は、始めから終りまでどれだけこのドラマを活かした事か知れなかったのです。觀て居るうちに、聽いてゐるうちに、幾度か胸に込み上げて來る熱いものを感じました。この眞劍なる病院の光景を一人でも多くの人々に見せたいと思ひ、その夜のドクター鈴木の説明の言葉を借りてドラマの代りに用ひ、各場面の光景を讀者諸氏に想像して頂きたいと思ひまして、これを誌上に載せることにしたのであります。

此れに依って病院全体への私達の感謝の念を新にし、又病院として何時も困難してゐる看護婦見習(ナースエイド)の不足を補ふ事の一助ともなれば、記者として何よりの悦びであります。(A・T生)

シーン (1)

朝まだき、八つの鐘がポストンの空に鳴り響く時ー午前八時、昨夜一睡もしなかった夜勤の看護婦さんと、今日の午前勤務の看護婦さんとの交代時間。昨夜退院された患者さんのベッドももうすっかり拭き清め、メーキベッドにいそしむ看護婦さん方。新らしい患者の入院通知があったからです。

シーン (2)

死と生の岐路に立つ患者を看護る白衣の天使、あたゝかい心、やはらかい手、かたい決心、物事に動じない日頃から訓練された動作。

今患者の生命を取りもどす戰鬪が展開されてゐます。

入院した患者の脈搏は微弱、容態は刻一刻と悪化してゆくばかりであります。早速ドクターはナースエイドのヘルプに依り患者に輸血する場面であります。

シーン (3)

悲喜劇が交々行はれるのが病院の毎日であります。御産室のウオード六では、今御目出度出産のあつた喜、オギャーと一聲、人生のスタートを切つたベビーは産室からナーセリーに運ばれて、生れて始めての手當をナース・エイドより受けます。

先づ手を洗ひマスク、ガオンに身をあたためたナース・エイドの注意深いベビーの手當を御覽下さい。

シーン (4)

いくら恐しい傳染病でも決して拒まないのが病院であります。その理由は一に社會に傳染病傳播を防止する為、次に傳染病患者治療の為に、しかしてどうして恐うした恐ろしい病が看護婦に感染しないのでせうか。病院當局は病院従業員、特に看護婦の毎日の保健には注意を拂つて居ります。厳重な取締りに絶へず注意を拂つて、皆様よりお預りして居ります看護婦さん方に悪い病にかゝる事のない様萬策を講じておるのであります。

ドクター方並に看護婦の決して忘れてはならない五つの項目は、

一、必ず手を洗ふ事、それは患者の手當をする前後、何をするにつけても、必ず手にソオープをつけ良く洗ふ事。マスク。ガオンも亦彼等

の忘れてはならぬ規則であります。

二、患者の一度使用したベッドは、病名の如何に拘らず好く洗ふ事。

三、リネンの消毒、傳染病患者の使用したリネンは、必ず洗濯に送られる前に消毒する事。

四、ドクターの使用した機具は、何れも熱湯でボイルする事。

五、結核患者の痰の始末は、一番危険なものでありますが、病院ではこれを最も安全な燒却法に依って始末してゐます。

これ等の必要事項を嚴格に、忠實に實行してゐる看護婦さん方に御注目下さい。

シーン (5)

今朝入院した患者は丁寧に診察を受け、もう外科室に送られて來ました。手術室は二十四時間を通し、いつも用意が整って居ります。外科室に入る前にはドクターも看護婦も手を十分間ソオープで洗ひます。消毒衣、マスク、キャップ等十二分の準備を要します。因に此場面の主人公は村上ドクターであります。

シーン (6)

手術がすみますと、看護婦達は次に來るべき應急の用意をいたします。何時急病患者が來るか、神ならぬ身の誰も知るすべがありません。忙しいサプライ・ルームの光景ではありませんか。

シーン (7)

目まぐるしい午前も文字通りの駆足で走り通し、中食のタイムとなりました。病院のケッチンで營養物がおいしく調理せられて各病室に運ばれて來ます。患者は各自病氣によって普通食、ソフト、流動物と種々適當な食事が供與せられます。

シーンは動きのとれない重症患者が看護婦さんに食べさせて頂く處、食事中も看護婦さんは仲々忙しいのであります。

シーン (8)

ボストンの病院に限らず、病院では中食後一時より三時迄を晝寢のタイムといたします。しかし暑いボストンの病床では、ピロー・ケース、シーツを氣を付けて代えて上げないと汗の爲に眠られない事が多々あります。看護婦さん方の御心遣ひを御覽下さい。

シーン (9)

時計が九つの鐘を眠たく打った時、看護婦さんも一日の暑さでガックリし、疲れ切った時でも、未だ病院一日のプログラムは終りません。もう一度、患者さんの顏を洗ひ、手をぬぐひ、背中にアルコホールをぬって、一通りの就寢前の手當を施して患者さん達を靜かに夢の國に送り込むのであります。

此れで今晩のドラマは終りました。お暑いところ、長い時間を御辛抱下さいましたことを感謝致します。(終)

ヴィタミン醤油 中 醤油

白味噌 金山寺味噌

東京漬 デンバ漬

日本種梅干コージ

デンバー市アラパホ街一九三五

ヴィタミン醤油醸造合社

醸造元 中村商會

開く白蓮

長藤行精

(5) 親心と隣人愛

大地も草木も燃ぎつくばかりの炎天の下、開拓中の土灰の道を今日もいそくと脇目も振らず、人々は自分の身を保護するに懸命で、氣候風土の変った此處の日中は人影さへも見えぬ時、吾身を忘れたかの如く歩む二つの影は毎日病院に消えて行く。

「お母さん！ 敬兄ちゃんは今日笑ってお話をしたね！。直きに良くなって家にかへるでせう……」。

兄の病氣を氣遣ふ十歳ばかりの妹の心にも喜びの色が漂ってゐさな元氣な足どりを見せてゐた。母とサエは、

「淳ちゃんにも暑い目をさせるね！」。

といたわると

「兄ちゃんの病氣が良ければ、えらいことはないよ。」

と二人の足どりは軽やかに我家の方に運ばれた。常に妹達を可愛がってゐた敬の心は小さな妹の上にも見える。

「おい、ママ！お隣りの敬さんも今日は大分良いらしいぜ。」

「さう！ あなたお見舞して来られたの？」

「いや今日は行きはしないが、敬さんのママさんの顔色や歩き方が昨日より良かったからさ。」

お隣りの德藏は夫人テツ子に語るのであった。佛さまは、

三界唯一心 ― 心外无別法。

と説かれ、古人も

心樂しくして春月を觀ずれば月笑み
心悲しくして秋月を觀ずれば月も亦
憂ふ。

と述べられ、私共の心の作用は自然に形姿に現れて心がすべての本となるのである。翌日父定一が病院を訪れると、

「敬君は良い心掛けの青年、立派な心の持ち主ですね……」

親切な藤野醫師は彼の父定一に告げるのであった。醫師が敬を診察せられた時彼は、

「私は佛さまの教を信じてゐます…」。

と醫師に話したのであった。親として可愛い吾子を譽められる言葉を耳にするは何より嬉しい。それから日數は相當経過したが敬の病狀は大して良い兆候を見せず一進一退してゐた。

或る日の夕方德藏が家に這入って來ると、

「あなた、何うしてそんな六つかしい顏をしてゐなさる?。心配ごとでも……。」

やさしい夫人テツ子は德藏の機嫌を伺った。隣人愛の情に厚い彼は、

「ウン、何うもお隣りの敬さんは良くないらしい。定一さんの樣子を見ても……。」

縫物の手をやすめたテツ子は、

「さうね!。實際子の病ひは親の病ひで、お氣の毒にね、よくなられゝばよいが。」

子を持つ親の心は皆一つで德藏や近所同區の者は互に同情の思ひにつきなかった。トボ〳〵と足も重さうに力一ぱい引き戸家にやっと腰を下したとサエは氣の拔けたやうに、

「唖々!!」

と大きく一ツ溜息をしながら、

「私の命は半分になっても、否全部代へても良い。敬の病氣が回復してくれゝば!」

心をいらだゝせてゐるのは彼女一人ではなく今の定一一家、否病ある者のある家に於ては皆同じで、晴れた太陽の光も薄暗い曇天の樣に危憂の雲は離れない。夜床に臥しても兩親の心は、

「今あの子は寢んでゐるか知らん、

具合は何んなかな！」

畫の仕事の中にも食事の折にも寸時も心から離れることのないのは親の至情で、此苦惱の世界に眞實私と共に泣いて下さるは、

衆生の苦しみ　我が苦しみ、
衆生の樂しみ　我が樂しみ。

と、のたまはせ給ふ佛樣で、泣く親、苦しむ子私共一切衆生を我が一子として慈悲と智慧とのみ手を指しのべ救い給ふ親心は、

「つら〳〵惟みるに如來(佛)一切苦惱の衆生海を悲憫して不可思議兆載永却に於て菩薩の行を行じたまひしとき三業(身・口・意)の所修一切念一刹那も清淨ならざることなく眞心ならざることなし。如來清淨の眞心を以て圓融無碍不可思議不可稱不可說の至德を成就し給へり。如來の至心を以て一切煩惱惡業邪智の群生海に廻施したまふ。」

との佛心を吾が身に味はゝさして頂く時私等の闇き胸、沈む心を晴らし慰め給ふ佛の慈光がありがたし。あけても今日は良いか明日は良くなるか、日夜吾子の善き成長や全快を待ちわび念ずる親のべ程この地上に尊くも美しいものはない。此姿の上にこそ法藏菩薩因位の御苦勞が偲ばれ、實に思惟すべきは佛、親、一切の御恩である。

「報恩謝德は衆善の源なり。尊きも卑しきも之を思ふ(乃至)おほよそ畜類なほ恩を知るためしあり。人倫としていかでか德を報ずる心なからんや。」

と報恩記にあつて私共の進む門の扉は既に開かれて涙ぐましくありがたい。而も嵩高なる父母の至情に孝するは子として辿るべき常道である。

☆　☆　（續く）

二世の悲戀（完結篇）

芳川積三

あまりにも意外な事實を聞かされた父は暫時唖然として、省次の顔を凝視るのだった。省次は必死となって愛人スーザンと深い仲になった經緯を語った。

「私等は今は、人種とか、國境とかの觀念を超越した、純愛に全部を捧げ合ってゐるのです……。實は此二三日中に萬難を排し正式結婚をする積りで居りました所へ、急にお父さんからの電報が參りましたものですから、お迎に行きました樣な譯でありまして、此事に就て早くお知らせする積りでしたが、商賣が忙がしいのに取紛れてお知らせするのを怠ったため、斯う云ふ仕儀に立到った事は何共申譯はありません。」

と力をこめて父に詫びた。

「ウーム……困った事になったな！」。前にも云った通り、ふじ子の入籍も済んで居るし旅券もお前の妻となってゐるのだ。」

と一寸言葉を切り、

「其の白婦人の方は金で何んとか話は出來んか。」

「お父さん、何んにも仰しやらずに、今度の我儘だけは通さして下さい。」

流石、世の辛酸を嘗め盡してきたゞけあって父親は、此場になっても彼を頭から呶鳴る樣な野暮な事はしない。さも〈當惑した樣に吐息をしながら

「弱ったなー、お前はそれでいゝと しても、ふじ子の両親や本人にどうして云ひ譯が立つか。今更愚痴を零しても仕方がないが、これが早く判ってさへ居れば、こんな事にならなかったのだが、縣人會長の澤田さんと、農業組

合の中本さんから、省次が近頃怪しい白婦人に迷つてゐるから、今の内に何んとか方法を構じたが好からうと云ふ手紙を寄越したものだから、ふじ子の両親とも相談して大急ぎでやつて来たのだ。」

と云つて、ふじ子の方を振り向いて、

「ふじ子、何んとも申譯のない事を省次が仕出かしたが、お前の遠慮のない意見を聞かしてお呉れ。」

先刻から二人の話を悲しさうにうつむいて聞いて居た可憐なふじ子は、ともすれば出さうになる涙をじつと堪へ、

「私は凡てを諦めます、省次さんの好い様にして上げて下さい……。」

と云つて、しく〳〵泣き出した。

父は可哀想でたまらないと云つた様に、彼女の肩にそつと手をかけ、

「ふじ子、救してお呉れ。何んとも申譯がない。その代り、此先は俺の娘として出来るだけの事はする。」

と云ひつゝ省次の方へ向き直り、

「併しなー省次、俺も四十年間アメリカで暮して、日本人と白人との結婚、いや恋愛を随分見てきたが十中の八九は旨く行かない。其れを見ても知れやう。くどいやうだが今一度考へ直して見る氣はないか。」

「お父さんも、ふじ子さんも、馬鹿な奴と思つて救して下さい。」

父子の両眼にも、ふふじ子の両眼にも涙が光つてゐた。

省次は一昨夜から一瞬の休もなく、自分の身邊が走馬燈の様に動いたのに心身共疲れ果てゝゐたが、夜明け前急いでアパートに歸つた。スーザンは寝もやらず、心配さうに待つて居つた。彼は凡ての経過を話し、

「と云ふ譯で父親やその娘の方は曲りなりにも話は附けてきた。今度はお

前が両親の承諾を得てくれれば万事O・K
だから、明日パサデナの家へ行って話
をしてお出で。」
「えーさう致します。お父さんの方
は難しいでせうが、お母さんは私共に
理解を持って居てくれますから……で
も、萬一、両親共に承諾して下さらな
くとも、私は丁年に達してゐますから、
法律上自由結婚が出來ます。」
「それもさうだが、事は出來るだけ
穏便にやる方が後の為にいゝからね。」
彼は一寸微笑んだゞけで、早朝再び
父の許へ出掛けて行った。噫、之が今
生の別れにならうとは、神なら為身の
知る由もなかった。
スーザンはその夕方勇氣を鼓して、
パサデナの實家へ歸った。
丁度、父母がパーラーで何か話をし
て居る所であった。彼女の姿を見ると
父は厳しい目でじゝと睨み、

「スーザン、何しに來たッ。」
と怒鳴りつけた。
「あなた少しお静かに願ひます」
と云ひつゝ母は彼女を自分のソファ
ーに腰掛けさせ、
「今お前の事でお父さんと色々御相
談して居ったのだが、お父さんは日本
人との結婚はどうしても不可ないと云
はれます。」
「お母さん、どうしてゞすか……。」
云はせも果てず父親は、すっくと立
上り、
「どうもかうもあるかッ、何を好き
好んでジャップなどゝ結婚するかッ。
少しは俺の立場も考へて見い……。ナ
ッシュの仕入部長の息子リッチャードは
是非、お前を欲しいと云ってる。まだ
他に隨分方々からもそれとなくお前を
望んで居るのに、どうしてジャップな
どと結婚する氣になったかッ。俺は断

じて許さん。」

か弱いむ女も恋には強い。

「お父さん、口惜ったい事を申す様ですが、そんじよそこらの女の機嫌をとるのらくら息子は私は出が好かんのです。そして多くの白人は、日本人の眞の姿を知って居られないのです。お父さんもその一人です。私が日本人と結婚するのがどうしてそんなに悪いのでせう。若しも他人種だとおっしゃるなら、お父さんはフランス系、お母さんはドイツ系で他國人同志ではありませんか。」

「黙れ〈小賢い事をつべこべと云ふな。断じて許さん。若しも貴様が強いてそのジャップと結婚するならして見よ。誘拐罪はなり立たないかも知れないが、結婚せずして同棲したのは白娼法に抵觸してゐる。そしてそのジャップを白娼法で訴へ牢屋へ打ち込んでやるから。」

之を聞くと彼女はわーっと泣きながら、

「お父さんは、あんまりです〈」。

と母親にしがみ附いた。

母親は斯ふ父娘が正面衝突しては迚も話は進行しないと思ひ、娘を宥め賺して寢室に連れて行き、

「今晩は、もう晩いからお休み、後で私がお父さんによくお話しするから、余り心配おしでないよ。」

と、母親だけに娘に同情し、何くれとなく慰めて引きとった。スーザンは興奮して寢附かれぬ儘色々と惱み、父が若し、省次を白娼法で訴へる様な事があったら、たとへ罪にならなくっても、それが爲に私に嫌氣が差し、あの日本から來た娘と私の愛する省次が結婚する様な事になりはしまいか。私は省次なしでは生きて行かれない。あゝ、

どうしたら好いだらうか……。」

世馴れぬ乙女心の煩悶は、兎角極端に走り易い。昨夜よりの過度の心勞に思ひ余つたか、両親には先立つ不幸を詫び、省次宛の遺書は是非彼の手に渡して呉れる様申添へ、夜明け間近き四時頃、彼女がいつも護身用として持つてゐる二十二番銃口のピストルを下顎から頭頂に向け押しあてゝ自殺をした。

噫、遂に悼ましくもオロサ事件の二の舞、何も知らない省次は彼女の安否如何を按じつゝ待ち詫びて居つた。

翌朝グロツサリーの井上さんと友人児玉が驅け附けてきて、今朝明け方スーザンがピストル自殺をした事を告げた時、彼は余りの驚愕に、早發痴呆症になつて、空ろの目をしてきよろ〳〵と其處らあたりを見廻すのであつた。急を聞いて都ホテルから父も驅けつけてきた。皆が何より恐れたのは、彼が恋人の後を遂つて自殺しはしまいかと云ふ事であつた。二三日、父とふじ子の嚴重な監視の許に彼は徐々に正氣を取り戻しはしたものゝ、目を離す事が出來ない。父が涙を流しての意見と周圍の者の監視で事なきを得たが、彼は一再ならず自殺を圖つたのであつた。

遽しき内に其の年も暮れ、世は擧げて萬象更生の氣、天地に滿ち〳〵て初春が訪れたが、彼省次にはスーザンなくして月も花もない。まして商賣なぞ何んの興味も持たなくなつてしまつた。

花市場の店の方は、父親とふじ子が暫くやつて行く事にした。省次は何事も手がつかず、鬱々として悶々のうちに、一ケ月ばかり過した或る日、思ひ掛けなく亡き愛人スーザンの両親が彼を訪ねてきて、彼女よりの遺書を彼に手渡した後、涙ながらに父親は、

「省次さん、私も詰らん世間体など

と云ふちっぽけな感情にとらはれた為、大切な娘を失くしたと共に、あんたに對し實に申譯のない事をしました。併し娘の死によって人種偏見とか、白人優越感とか云ふ自惚心は綺麗さっぱりと拭ひ去って仕舞ました。で、せめて娘の死を有意義なものにすると共に供養の為、是れから私は日本人の為、及ばずながら私の能ふ限りの範圍に於て、何でも致しますからどうか赦して戴きたい。」

と云って大粒の涙を流し、省次の両手をぎゅっと握り締めた。

「有難うございます。私はスーザンがなかったら、もう生きて行くのに何んの望みもありません。」

と省次は男泣きに泣いた。文を聞くと母親は、わっと泣いて省次にしがみ附いた。泣き歔欷りながら、

「省次っ、〳〵、スーザンも可哀想な事になって仕舞ひました。あれもどんなに、あんたを思って居ったか目に見える様です。せめて一日でも晴れてお前と暮さしたかったッ……、それば かりが心残りで……」。

と云って二人は身を震はしながら相抱いて、潸々と泣くのであった。

三人は暫時悲しみに閉されて居ったが、やがて父親は涙の目を上げ、

「省次、どうかあれの墓参りをしてやって下さい。」

と懇願した。

「私はそのお許しが出るのをどんなに待ちましたか。深夜、幾度スーザンの眠る墓地の邊を彷徨ったか知れません。」

と涙に頬をぬらし乍ら彼は両親の前でスーザンの遺書を開いて見た。

彼女の遺書には、

「私は限りなき省次の愛をしっかり

胸に抱いて死んで行きます。私が死んでも私の事を忘れないで、そしてどうか、私の両親を怨まず、許してやって下さい。」

といふ様な事が書いてあった。三人は亦も新なる涙に誘はれるのであった。

常夏の幸加も如月は、空行く雲は濃く雨や風に襲はれ勝ちである。その風雨の中を面窶れした省次が力なく、白人墓地をとぼ〳〵と奥へ奥へと吸はれて行く。その姿は見る者聞く者をして彼の純情に涙を絞らせるのであった。

今パサデナに熱烈なる日本人擁護團のあるのは周知の事であるが、此團体を牛耳って居るのは悲しい恋に殉じたスーザンの父親であることを知ってゐる人は少い。

省次の父親は六ヶ月ばかり滞在して日本へ帰ったが、ふじ子は省次の店の支配人格になって、か弱い女の手で切廻して居った。

心に深い痛手を受けた省次は、終に『女』に對しては全く関心を持たなくなり、彼が幼少より最も好きであった機械いぢりに熱中してその悲しみを忘れる様にしてゐたが、今はポストンで配所の月を眺めつゝ、眉目秀麗な容姿に年頃の娘の心を惱ましつゝ、われ関せず焉として、機械工場に働いて居る。(完)

俳句

鈴木緑松

名月や出征兵を送りけり。

夕立や練馬大根淺き蒔き。

通信販賣

アイオン・電気器具・クーラー用モーター及び新プアン

日本食料品一切其他何でも御用命に応じます

ミツバ商会

2639 LARIMER ST. DENVER, COLO.

Nov. 1944 Vol. 2, no. 9

編輯後記

○「いゝ雑誌だ。」といふ各方面からの讃辞に私共は鼓舞されて、尚一層よい雑誌を作り、皆様の御期待に副ひたいものと努力を致して居ります。

○近頃原稿の集りがよく私共編輯者は寄稿家諸氏に感謝してゐます。唯茲に御断り申上たい事は、僅か百頁足らずの限られた誌面には載せきれず、色々苦心するのですが結局不本意乍ら次号に割愛したり、或は季節の関係上載せられずに終る事があります。編輯者の意のある處を御諒解下さるやう御願ひ申上ます。

○カットが出来なかったり、用紙が間に合はなかったりして延び〳〵になってゐた文藝同人の寫眞は、どうやら今月号には載りさうであります。

○山内(マンザナ)阿世賀紫海(ハート山)脇地貫水(アーカンソー)竹原(ツル湖)の諸氏より寄附を頂きました。厚く御禮申上ます。

○本誌の編輯、印刷並びに製本の為に毎号並々ならぬ御盡力をして下さる正木、中島、東、石丸、酒井の諸氏、重富、亀重、西田、小倉諸嬢に對し深厚なる謝意を表す。

○前号で募集した「懸賞小説」の締切は十一月廿日迄延期しましたから奮って應募して下さい。

○晝間はまだ時には クーラーを廻したい程暑くっても、朝夕は火の傍が恋しいポストン獨特の氣候となりました。皆様の御健康を祈ります。

ポストン文藝 第貳卷第九號 一九四四、十一月號

編輯者 松原信雄 有田百島原潮風

印刷所 ポストン印刷所

發行所 ポストン文藝協會

UNIT I CITY HALL. POSTON. ARIZ.

POSTON POETRY CLUB

Unit I, City Hall

POSTON, Ariz.